

# アチックフィルム・写真と現地上映会

——薩南十島と台湾パイワン族を中心に——

Film Screening On Location and the Attic Films and Photographs

Focusing on *Satsunan Jitto* and the *Paiwan* People of Taiwan

高城 玲

TAKAGI Ryo

## 要 旨

神奈川県日本常民文化研究所には、渋谷敬三を中心とするアチックミュージアム同人らによって主に昭和初期の1930年代を中心とする調査旅行などの際に撮影された計23作品の動画フィルムと約9,000点弱にのぼる写真が所蔵されている。

本稿はこのアチックフィルム・写真を対象とし、以下の3点を検討することで、後に続く各論考への導入とすることを目的とする。第1に、アチックフィルム・写真の概要を紹介し、中でも共同研究で重点的に取りあげた薩南十島と台湾パイワン族に関するビジュアル映像資料について概要を示す。第2には、共同研究全体で取り組んできた調査、特に鹿児島県十島村と台湾屏東県のパイワン族集落で行った映像資料の現地上映会という方法の概要といくつかの特徴的事例を検討する。第3には、アチックフィルム・写真という映像資料が保持している可能性、また現地上映会という調査方法の可能性の双方を探ることを通して、ビジュアル映像資料の文化資源化／社会化という議論の一面を考える。

特に映像資料は文字資料に比して時空間や言語を超えて共有しやすい間口の広さという特性を有するがゆえに、当時撮影され救出（サルベージ）されたビジュアルな映像資料を現代の現地の人々に見てもらい調査の方法が可能となる。そうした現地上映会は、映像そのものの共有による現地へのフィードバックにとどまらず、映像を同じ時と場所で共に見て・語り・伝え合うという経験の共有を可能とする方法ともなる。上映会という方法は、その場で経験を共有し、身体と感情を共振させることによって、過去のサルベージを超えて、未来のあり得べき可能態を創造し生成させる母胎として、また、未来への新たな生を切り拓くひとつの基点として可能性を有するものとなりえるのである。

**【キーワード】** アチックフィルム・写真、薩南十島、パイワン族、現地上映会、文化資源化／社会化、ビジュアル・サルベージ、フィードバック、共有

## 1. はじめに

神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）には、渋沢敬三（1896〈明治29〉～1963〈昭和38〉年）<sup>(1)</sup>を中心とするアチックミュージアム<sup>(2)</sup>同人らによって主に昭和初期の1930年代を中心とする調査旅行などの際に撮影された計23作品の動画フィルムと約9,000点弱にのぼる写真が所蔵されている。これら数多くの「アチックフィルム・写真」は、大正末から昭和初期にかけての日本各地の景観とそこに住まう人々の生活、民俗、芸能や当時使用されていたモノを具体的なビジュアル映像資料として記録にとどめている。また、中には当時日本の統治下におかれていた台湾や朝鮮、満州などの映像も含まれており、これまでも多様な学問分野から貴重な資料としてその価値を認められてきた<sup>(3)</sup>。

今回、2009年度からは国際常民文化研究機構が常民研を母体として新たに発足したことを受け、このフィルムと写真を主な研究対象とする「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を推進してきた。共同研究に参加したメンバーは、本叢書〔論文編〕に論考を執筆している各氏で、民俗学、人類学、映像社会学、民具学、建築学、博物館学、日本村落史などの多彩な専門分野から構成されている<sup>(4)</sup>。

今回の共同研究では、発足当初から主に2つの課題を念頭に置いている。第1は、国際常民文化研究機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携し、ビジュアル映像資料の文化資源化／社会化の可能性を探るという課題であり、第2は研究目的として主に（1）モノという物質文化の問題、（2）モノと人との関係性の問題、（3）異文化（自文化）表象の問題等を個別の視点から検討するという課題である。

第1の課題に関しては、昨年2013年度に『国際常民文化研究叢書8—アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象—〔資料編〕』（以下、叢書〔資料編〕）として、「薩南十島」に地域を限定しながらビジュアル資料の整理とその文化資源化／社会化を行い、ひとつの成果を提示した。その続編とも言える本叢書〔論文編〕では、上記2つの課題に対し、参加メンバー各自の視点から論考というかたちで応えることを意図している。

その冒頭において本稿では、以下の3点を示し検討することで、後に続く各論考への導入とすることを目的としたい。まず第1に、常民研に所蔵されているアチックフィルム・写真の概要を紹介し、中でも本共同研究で重点的に取りあげた薩南十島と台湾パイワン族に関するビジュアル映像資料について紹介を行う。第2には、本共同研究全体で取り組んできた調査、特に鹿児島県十島村と台湾屏東県のパイワン族集落で行った映像資料の現地上映会という方法の概要といくつかの特徴的な事例を検討する。その上で第3には、アチックフィルム・写真という映像資料が保持している可能性、また現地上映会という調査方法の可能性の双方を探ることを通して、ビジュアル映像資料の文化資源化／社会化という議論の一面を考えてみたい。

本稿は、共同研究が対象とした資料と全体での調査の概要や可能性を示すことで、当初から念頭に置いていた2つの課題の主に第1に応えることに重点を置いている。いわば、共同研究全体の概要と試みを検討し、本叢書〔論文編〕で続いて繰り返りひろげられる主に第2の課題に対する各論考への架け橋となるべき位置づけとすることができるだろう。

## 2. アチックフィルム・写真とは

まずは、本共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」が対象とする常民研が所蔵するアチックフィルム・写真の概要について紹介しておきたい。

アチックフィルム・写真という名前は、これまで一般的に呼び習わされてきた名称ではない。以前は、アチックミュージアムを主宰していた渋沢敬三の名前を冠して「渋沢フィルム・写真」として通称されてきた。アチックフィルム・写真という名称は、2009（平成21）年頃から国際常民文化研究機構の本共同研究を中心に本格的に使用されるようになったものである。もちろん主宰者でありプロデューサーとも考えられる渋沢敬三の中心的役割を重要視しながら、実際の撮影や編集にはアチックミュージアムの同人が関係していたことも勘案し、全体としてアチックフィルム・写真という名称を使用することとしたのである。

以下本章では、常民研が現在所蔵する資料の中でこれまで比較的整理が進んでいるアチック写真の概要を示し、その後にアチックフィルムの概要を紹介したい。

### 1) アチック写真

戦前のアチックミュージアムから戦後の財団法人日本常民文化研究所を引き継いだ神奈川大学日本常民文化研究所には、大正末から渋沢をはじめとするアチックミュージアム同人（以下、アチック同人）によって撮影された写真が9,000点弱所蔵されている<sup>(5)</sup>。現在所蔵されている形態としては、基本的に写真1枚につき1頁の紙製台紙を布製・紙製の表紙に綴じたアルバム（図1参照）が120冊、写真点数として約4,000点のほか、アルバム以外や封筒にまとめられた紙焼き写真やネガフィルム、ガラス乾版といったバラの写真約5,000点弱に大別される<sup>(6)</sup>。特にアルバム化されているアチック写真は、台紙に写真に関連する文字情報が手書きで記載されているものも多く、アチック同人等の個人署名がされているものも少なくない（図2参照）<sup>(7)</sup>。

本共同研究では、アチックフィルム・写真の中でも、主に渋沢やアチック同人を中心とする調査

図1 アチック写真のアルバム  
（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）



図2 台紙に整理されたアルバムのアチック写真（ア-9-94）



旅行の際に撮影された映像資料に着目することとした。撮影者に関して、台紙への署名記載や他の関連文献資料から分かることは、渋沢本人が撮影した写真も存在するが、そのみならず、それぞれの調査旅行に同行していた宮本馨太郎<sup>(8)</sup>や早川孝太郎<sup>(9)</sup>、高橋文太郎<sup>(10)</sup>、桜田勝徳<sup>(11)</sup>、村上清文<sup>(12)</sup>、小川徹<sup>(13)</sup>などのアチック同人が数多く写真を撮影し、情報を記載していたということである。こうした背景を鑑みて本共同研究では、渋沢を中心としたアチックミュージアム調査団全体を撮影の主体と捉え、アチック写真という名称を使用している。

神奈川大学常民研におけるアチック写真の整理状況に関しても簡単に触れておきたい。アチックミュージアムから財団法人時代、神奈川大学招致以降の初期においてもアチック写真の整理は何らかのかたちでなされていたと思われるが、その際の整理基準などに関する詳細は不明である。そのため、現在進めている整理作業は、以前に整理した際の追加情報も合わせて、現在残されている情報を網羅的に整理するという再整理の作業と位置づけられる。具体的には、写真資料1点ごとにできる限り詳細な情報を盛り込んだ目録化作業が進められている<sup>(14)</sup>。再整理の当初から資料全体の詳細な目録化は困難なため、インデックスを作成する粗目録から出発し、写真資料の記載事項や資料自体の物理的情報を加味した仮目録を経て、参考資料や文献を参考にした関連情報を盛り込んだ本目録へと段階に応じた目録化が行われてきた<sup>(15)</sup>。

2009年度に国際常民文化研究機構が発足してからは、常民研における所蔵資料の情報共有化事業を中心に、本共同研究とも連携を取りながら資料整理が進められている。現在のところ、鹿児島県大島郡大和村や鹿児島県十島村、香川・愛媛・岡山・広島・山口県などの瀬戸内海沿岸地域、愛知・長野・岐阜県などの三信南遠地域、奈良・三重・和歌山県などの吉野・熊野地域を中心に本目録化の作業が進められ、その成果は冊子『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol.1-8』や「アチックミュージアムにおける写真資料」というウェブサイトでも順次公開されている<sup>(16)</sup>。

## 2) アチックフィルム

比較的整理が進められているアチック写真に対して、アチックフィルムという動画映像フィルムに関しては、これまでいくつかの例外を除いて研究対象として正面から取りあげられることは多くはなく、情報の整理も十分に進められてきたとは言い難い<sup>(17)</sup>。

アチックフィルムは主として昭和初期1930年代に、当時16ミリフィルムで撮影され(図3参照)、その後戦後に何度か複製コピーが作成された<sup>(18)</sup>。現在、常民研では原版とともに1995(平成7)年に複製コピーされたデジタルベータカムビデオカセットをマスターコピーとして保管している。所蔵・保管されているアチックフィルムは、作品数としては23作品であり、全て音声がない無声の映像である。16ミリフィルムの段階でつなぎ合わせて編集されていたと推測され、23作品中10作品では作品タイトルや地図、字幕での説明が付されている。

図3 アチックフィルムの16ミリ原版  
(神奈川大学日本常民文化研究所所蔵)



本共同研究では、主に渋沢やアチック同人を中心とする調査の際に撮影された映像資料に着目し、国際常民文化研究機構(以下、機構)の情報共有化事業と連携しながら、まずは資料の概要確認と整理を進めてきた。本叢書巻頭に常民研が所蔵する調査関連のアチックフィルム一覧を掲載している。

この一覧を見てみると、1929（昭和4）年の1例を除いて、撮影時期が1930年代の1937（昭和12）年までとなっている。対象は日本のみならず、台湾、満州、朝鮮多島海、台湾パイワン族といった当時統治下にあった地域にまで広がっている。

フィルムの撮影・製作に関しては、渋沢が購入した16ミリカメラで行われ、渋沢が中心的な役割を果たしていたと考えられるが、他に調査に同行した誰が具体的にカメラを回していたのかということに関しては詳細が十分に明らかにされていない。渋沢個人が被写体となっている映像もあるので、同行したアチック同人も撮影に加わっていることは確実である。中でも映画に造詣が深く自らも9.5ミリのフィルム映像を撮影していた宮本馨太郎の関与が大きかったと考えられ、特に渋沢が同行していないNo. 20の台湾パイワン族の映像（※フィルムNo. については、本叢書「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧（アチック調査関連）」を参照。以下も同様。）は宮本馨太郎が中心となって撮影されたと考えられる。撮影と撮影後の編集ということも合わせて全体として考えると、渋沢を中心としながら宮本の他、アチック同人の桜田勝徳、村上清文なども関係していたと思われる。本稿では、フィルム撮影と編集における宮本の果たした役割の重要性を認識しつつ、渋沢を中心としたアチック同人らによる調査団全体を撮影・編集の主体と捉えることとしたい。

### 3. アチックミュージアム調査とビジュアル映像資料—薩南十島と台湾パイワン族

常民研が所蔵するアチックフィルムの一覧からも見て取れるように、No. 2の東京三田綱町の渋沢邸で撮影された花祭のフィルムを除けば、アチックミュージアムの調査旅行とビジュアル映像資料が密接に関連していた。本章では、本共同研究が重点的に取りあげた薩南十島と台湾パイワン族の映像資料を中心に、それらとアチックミュージアム調査（以下、アチック調査）との関係の概要を確認しておきたい。

#### 1) アチックミュージアム調査の旅

渋沢敬三は、経済人として多忙な中にあってもアチックミュージアムの活動に割く時間を捻出し、

表1 渋沢が同行した戦前におけるアチックミュージアム調査の旅

年	回数	行 き 先
1927（昭和2）	2	東京・三ヶ島村
1928（昭和3）	2	三河上黒川、三河稲橋ほか
1929（昭和4）	1	三河北設楽
1931（昭和6）	3	飛島、津軽・竜飛岬、信州・中馬
1933（昭和8）	3	三河北設楽、越後三面、田沢湖・仙岩峠
1934（昭和9）	4	薩南十島、隠岐、三河長江、男鹿・石神・八戸
1935（昭和10）	9	三河、能登、紀州・伊勢、下呂・越後、越後山古志、霞ヶ浦、岩手岩泉、黒部・氷見・金沢、近江
1936（昭和11）	6	高田、韓国多島海、四国・淡路、岩手石神、白河・棚倉、越後・村上
1937（昭和12）	5	武蔵・秋川、(台湾パイワン族)、安芸三津・広島、瀬戸内海沿岸、志摩先島、越後
1938（昭和13）	4	松本・浜名湖、手賀沼、兵庫・家島、長野・新潟
1939（昭和14）	2	伊賀上野・奈良、盛岡・三陸
1940（昭和15）	1	出雲
合計回数	42	

注：下線は船を借りあげて島々をめぐるなど比較的大規模な調査の旅。また、台湾パイワン族の調査の旅に渋沢本人は同行していないが、本稿で取りあげる関係で参考のために記載を加えてある。

出所：渋沢（1993）と中山（1956）、斎藤（2001）をもとに作成。

本人自身も合間を縫ってアチック調査の旅に同行している<sup>(19)</sup>。著作集に収められた「旅譜と片影」(渋沢 1993) や還暦の際に編集された『柏葉拾遺』(中山 1956) の記述を中心に戦前のアチック調査に関連すると思われる旅を表 1 で拾い上げてみても、アチックミュージアムとして数多くの調査旅行が行われ、渋沢自身もこのアチック調査の旅に同行していたことがうかがえる。

渋沢の「旅譜」を主な根拠としているので、そこから漏れているアチック調査の旅も存在している可能性は残り、また渋沢が同行しなかったアチック同人の調査の旅は上記の表には含まれていないが、概略は見て取れるものと思われる。ここから分かることは、アチックフィルムが撮影された時期と重なり、戦前のアチックミュージアム時代には 1930 年代の特に 1931 (昭和 6) から 1938 (昭和 13) 年にかけての 8 年間に 34 回、全体の約 8 割という高い割合で集中的に調査旅行が行われていたことである。この点は、渋沢本人がその後に経済人として多忙になっていく時期や、1942 (昭和 17) 年の日本銀行副総裁就任、その後 1944 (昭和 19) 年総裁就任などの影響のほか、1940 年代に入ると一層の戦時体制強化の中で調査も難しくなっていく環境の悪化が背景に推察される。

以下、2) と 3) では、アチック調査旅行の中でも本共同研究で注目した 1934 (昭和 9) 年の薩南十島と 1937 (昭和 12) 年の台湾パイワン族の調査と映像資料との関係を示すが、その前にこの 2 つの調査と映像資料に着目した理由を簡潔に述べておく必要があるだろう。

本共同研究では、2009 年度から調査としては 3 年間という限られた時間的な制約があったため、アチックフィルム・写真に記録されている全ての撮影地域を網羅する余裕がないことは当初から認識されていた。そのため、いくつかの撮影地を対象を限定して資料整理、研究を進めることをひとつの方針とし、具体的には薩南十島と台湾パイワン族にまずは着目したのである。

最初に注目したのは、1934 (昭和 9) 年 5 月にアチック同人等の調査団が行った薩南十島 (現在の鹿児島県十島村) 調査時の映像資料である。当時の薩南十島調査は、短期間に各島をめぐるという駆け足の調査ながら、民俗学・民族学、宗教学、地理学、農学、生物学、自然人類学、地質学などの各専門家を含む総勢 20 名以上による大規模で画期的な合同調査であった。数あるアチックフィルム・写真の中でまず薩南十島調査を選択したのは、上記のように重要な共同調査であること、また、資料が比較的まとまっており、特にフィルムが編集されて字幕解説もついていたことなどの理由による。

次に注目したのは、1937 (昭和 12) 年に撮影された台湾南部の山地に居住するパイワン族調査時の映像資料である。この調査に渋沢本人は同行していないが、アチックミュージアムの調査として宮本馨太郎と小川徹が調査におもむき、フィルム・写真双方の映像も記録として残されている。この映像資料は、少人数での調査によって撮影されたものでありながら、現地に精通していた鹿野忠雄<sup>(20)</sup>を案内役として非常に貴重な動画、静止画の映像記録となっている。フィルムも字幕が付されて編集されており、本共同研究では、撮影当時日本統治下におかれていた地域の映像資料として整理・調査に着手する対象とした。

## 2) 1934 (昭和 9) 年の薩南十島調査

薩南十島調査は、1934 (昭和 9) 年というアチックミュージアムの調査が活発に展開されていた時期に行われ、その最大規模の共同調査だったと言えるだろう<sup>(21)</sup>。薩南十島とは、当時十島村 (じつとうそん) と呼ばれ、現在の鹿児島県三島村にある竹島、硫黄島、黒島の 3 島と、現在の十島村 (としまむら) にある中之島、口之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、宝島、臥蛇島の 7 島である。

調査の日程は表 2 に概略を示した通りである。1934 (昭和 9) 年 5 月 14 日に鹿児島を出航し、往路に薩南十島のうち臥蛇島、悪石島以外の各島を巡りながら、5 月 17 日に奄美大島の名瀬に到

表2 1934（昭和9）年 アチック薩南十島調査行程

日付	行程
5月12日	東京 → 鹿児島
5月13日	西桜島村訪問
5月14日	鹿児島 → (としま丸 約 150トン) → 竹島 → 硫黄島 → 口永良部島 (仮泊)
5月15日	→ 口之島 → 中之島 → 諏訪之瀬島 (仮泊)
5月16日	→ 平島 → 小宝島 → 宝島 →
5月17日	→ 名瀬 → (自動車) → 古仁屋 → 加計呂間島 (諸鈍) → 古仁屋 (泊)
5月18日	古仁屋 → 名瀬 (泊)
5月19日	名瀬 → (嘉義丸 約 3000トン) →
5月20日	→ 鹿児島

出所：渋沢（1993）、羽毛田・小林（2014）をもとに作成。

着し、大島で2泊した後、復路は名瀬から直接帰航し5月20日に鹿児島に到着している。

行程における特徴として、往路に各島々を巡る際にとしま丸という船を借りあげて船に宿泊しながら調査を行っている点である。としま丸はこの十島調査の前年に鹿児島と薩南十島を結ぶ航路が初めて就航した際の定期船である。渋沢を含む一行はこのとしま丸を借りきって約3日間という短期間ではあったが、各島に上陸して調査やフィルム・写真の撮影を行った。

薩南十島調査に参加した同行者を専門分野や役割別に分類してみると以下の様な構成になっていた。調査団全体の数は現地案内役も含めると22名で、同行した朝日新聞と毎日新聞の新聞記者2名を加えると計24名であった<sup>(22)</sup>。専門分野別に見てみると、渋沢本人を別にすれば、アチックミュージアム同人を中心とする民俗学・民族学関係では7名（桜田勝徳、早川孝太郎、宮本馨太郎、高橋文太郎、村上清文、大西伍一<sup>(23)</sup>、原田清<sup>(24)</sup>）、地理学1名（小川徹）のほか、九州帝国大学の江崎悌三<sup>(25)</sup>など生物学関連2名、小出満二<sup>(26)</sup>、谷口熊之助<sup>(27)</sup>など農学関係4名、地質学1名（鈴木醇<sup>(28)</sup>）、宗教学1名（宇野円空<sup>(29)</sup>）、自然人類学1名（三宅宗悦<sup>(30)</sup>）というメンバー構成であった（図4参照）。

この薩南十島調査同行者構成が示すように、総勢24名にもものぼる大規模な調査であり、かつ、アチック同人を中心とする民俗学・民族学、地理学などに加えて、宗教学のほか、各地の帝国大学などから自然科学分野の生物学、農学、地質学、自然人類学といった多様な分野の専門家達が調査に参加していることが分かる。このように多くの専門家を一行に加え、船を借りあげた大規模な共同調査という形態は、当時としては画期的なことだったと考えられる。先に表1で示した渋沢が同行したアチックミュージアムの調査の旅でも薩南十島以外には、1936（昭和11）年の朝鮮多島海と1937（昭和12）年の瀬戸内海沿岸の調査などがあるが、薩南十島調査はそれらに先駆けての最初の試みでもあった。

こうした共同調査が可能となった背景には、渋沢の経済的、政治的、精神的な求心力が大きかったことなどが推測される。その後、第二次世界大戦を経て戦後には、渋沢を会長として設立された九学会連合の大規模な共同調査が1950年代に対馬、能登、奄美などで実施され、今日に至る学際的共同調査へと継承されていく<sup>(31)</sup>。薩南十島調査はそうした試みに連なるひとつの先駆けと考えることも可能であろう。

薩南十島調査のもう一面の特徴は、調査対象を写真や当時最新鋭だった貴重な16ミリフィ

図4 宝島珊瑚礁上における薩南十島調査団集合写真  
（アチック写真：河1-26-2）



ルムで記録にとどめたという点である。それがアチックフィルム・写真であるが、まず写真に関しては、薩南十島調査関連のアチック写真アルバムでは、アルバム 9 から 13 までに収録された写真 435 点が存在している。写真を撮影したカメラは複数存在していたと考えられ、各島に短時間の滞在でありながら、同行した調査者が各自の関心にもとづく対象をそれぞれ撮影していたと思われる。これら薩南十島調査時のアチック写真は、先述したウェブサイト「アチックミュージアムにおける写真資料」で閲覧できる（2014年8月20日現在）。また、本共同研究の現地上映会調査を反映した叢書〔資料編〕には、アチック写真本目録 2013 年度増補版（昭和 9 年薩南十島調査関連）と題する写真資料を口之島と中之島に限定して収録しており、そこではより詳細な情報を確認することができる<sup>(32)</sup>。

また、薩南十島調査は合わせて動画フィルムで撮影され記録にとどめられている。これが本叢書の「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧（アチック調査関連）」の No. 9 に記した『十嶋鴻爪』というタイトルのアチックフィルムである。フィルムの冒頭に記載されたタイトルの「鴻爪」とは、出来事や人の行いなどが消えてしまってその痕跡が残らないことを意味する漢詩からの引用表現である。ここでは、前年に鹿児島との間に定期船が就航したこともあり、しだいに消滅しつつある薩南十島の生活や文化を動画フィルムという媒体でも記録にとどめ救出しようとした意図が推測される。

アチックフィルム『十嶋鴻爪』は約 52 分におよび、常民研が所蔵するアチックフィルム 23 作品の中でも最も長い作品のひとつになっている<sup>(33)</sup>。本書の別冊にも位置づけられる叢書〔資料編〕では、『十嶋鴻爪』の構成を 3 つの階層に分けながら、各カットの詳細をタイム表にまとめて提示した<sup>(34)</sup>。そこでは、船中の様子や各島へ至る景観、島民、芸能、民具などの映像がそれぞれの島ごとに順を追ってまとめられており、無声でありながらタイトルや説明の字幕が付されるなど、作り込まれた構成と編集の跡が見受けられる。特に、調査の行程説明の箇所では、手書きの地図を利用しながら島々を船が巡る過程を実写のアニメーション的な手法で示しており、力が入った映像作品となっている。

これら薩南十島調査関連の写真やフィルムにとらえられ、記録された内容から分かることは、まず第 1 に多くの島で調査団が島民から大歓迎を受けていることである。特に口之島では、調査団を迎えるために特別の杉門アーチ（小島 本書所収論文も参照）が作られ、島民がよそ行きの服装で

隊列をなして待ち受け歓迎している様子が映し出されている（図 2 参照）。このことは当時子爵でもあった洪沢のアチックミュージアム調査団が島を訪れることが事前に伝えられ、周到な準備が整えられていたことをうかがわせる。

また第 2 に、訪れた島々においていくつかの民俗芸能が調査団のために披露され、それが身体動作を伴った動画フィルム映像として記録されている点も特徴的である（図 5 参照）。これらの民俗芸能は、本来演じられるべき時期と異なっても、この時に訪れた調査団のために特別に演じられ披露されている。

第 3 に、特に動画フィルムにおいて、島を海上の船からとらえる景観と上陸後の景観、島

図 5 アチックフィルム『十嶋鴻爪』に収録された口之島の民俗芸能（狂言）

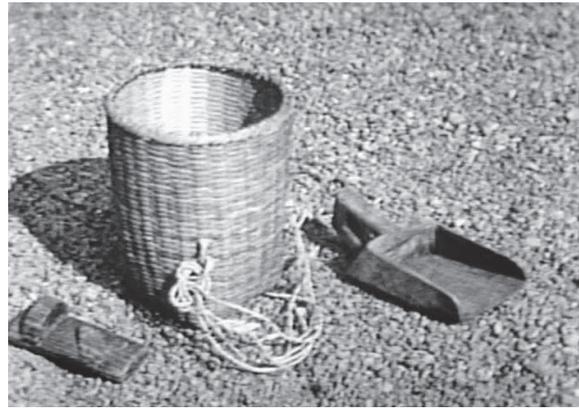


(No.9 0:21:52) ※フィルム No. とタイム表記については、本叢書「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧（アチック調査関連）」を参照。以下も同様。

の人々とその服飾のアップ画像、民俗芸能の映像、民家や倉、民具などのモノに関する映像などに焦点が当てられ、それらが順を追って並べられている点も特徴として挙げられるだろう。

また第4に、そうした順を追った映像の中でも、各島の映像の最後に「民具二 三」として、数点の民具をアップ画像で大写しにしている点が非常に特徴的である（図6参照）。これらの大写しにされた民具は、ゾウリやカゴ、カサ、キモノなどであり各島で1カ所に集められていたことがうかがえ、事前に民具の用意を依頼していた可能性が高いと考えられる。また、これら民具はこの薩南十島調査で収集され、アチックミュージアムを経て現在は大阪の国立民族学博物館に収蔵されているものも多い<sup>(35)</sup>。そうした収集品を動画フィルムで確実に記録していたことがうかがえる。

図6 アチックフィルム『十嶋鴻爪』に収録された中之島の民具



(No.9 0:33:43)

### 3) 1937 (昭和12) 年の台湾パイワン族調査

次に、本共同研究でもうひとつ注目し資料の整理・調査に着手することとした対象として台湾パイワン族の調査とその映像資料を取りあげたい。

この調査に渋沢本人は同行していないが<sup>(36)</sup>、アチック同人の宮本馨太郎と小川徹の2名がアチックミュージアムの活動の一環として日本から調査におもむき、現地の事情に精通し生物地理学や民族学を専門としていた鹿野忠雄の協力・同行を得て可能となった調査である<sup>(37)</sup>。鹿野は当時の台湾における原住民研究に携わっており、台湾総督府の嘱託ともなっていた。他に現地の協力者や同行者がいたことも推測されるが、同行した名前が分かっているのは、鹿野、宮本、小川の3名だけという少人数での調査である。

調査が行われたのは1937 (昭和12) 年3月から4月にかけてであり、日本出発を起点とすれば3月20日から4月6日ということになる。調査対象として当初は、台湾原住民の中でも台湾南東沖にある紅頭嶼 (蘭嶼) という島のヤミ (タオ) 族が候補として考えられていたが、最終的にはパ

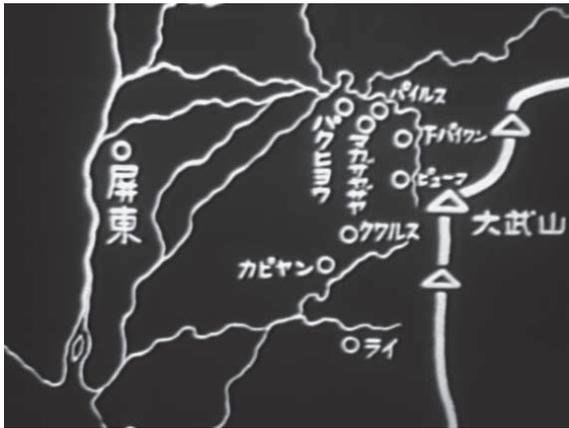
表3 1937 (昭和12) 年 アチック台湾パイワン族調査行程

日付	行程
3月26日	屏東 → 隘寮溪 → バクヒョウ → マカザヤザヤ (泊)
3月27日	マカザヤザヤ → パイルス → マカザヤザヤ (泊)
3月28日	マカザヤザヤ → タラバコン (粟焼き) → 下パイワン → ピューマ (泊)
3月29日	ピューマ → クワルス (泊)
3月30日	クワルス滞在 (泊)
3月31日	クワルス → カビヤン (泊)
4月1日	カビヤン滞在 (泊)
4月2日	カビヤン滞在 (泊)
4月3日	カビヤン → プンティ溪 → アブダン移住集落 → 林邊溪 → ライ (泊)
4月4日	ライ滞在 (泊)
4月5日	ライ滞在 (泊)
4月6日	ライ → 新置交易所

注：地名はアチックフィルムの字幕に記された表記をそのまま用いている。

出所：アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』の行程図、字幕と宮本・小川 (1937) を参考に作成。

図7 アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』に収録された行程概略地図



(No.20 0:01:37)

イワン族を選択し、台湾南部の屏東から山地に徒歩で入り、いくつかの集落に宿泊しながら調査と撮影を行っている<sup>(38)</sup>。

表3では1937(昭和12)年のアチックミュージアムによる台湾パイワン族調査の中で、屏東から山地の集落を調査した行程の概略を示し、図7ではフィルム映像に記載されている行程概略地図を示している。現在の地名で言えば、台湾南部屏東県の泰武郷、瑪家郷、三地門郷周辺にあたる。

この台湾パイワン族調査でも写真と動画フィルムの映像資料双方が用いられ、まとまった記録として残されている。まずこの調査で撮影さ

れたアチック写真について概略を整理すると、残されているアルバムの中で確実なものでは、アルバム69から75にかけての7冊に計270点の写真が存在している。

パイワン族調査のアチック写真においてはいくつか特徴的な点が指摘できるだろう。まず第1に、山地に広がる耕地や集落を遠景で撮影し、2-3枚の写真をつなげたパノラマ写真としているものが存在している点が挙げられる。景観の全体像をできる限りイメージしやすくかつ正確に記録しようとしたと思われる。第2に、人物の写真を老若男女を問わず数多く撮影している点も特徴として挙げられるだろう。また関連する第3の特徴として、人物写真を撮影する際に、民族衣装を身にまどってもらい、場合によってはその人物の前後左右の写真として網羅的に記録に残している点も挙げられる。その中には、装飾品のみならず、畑に出る際の農具と共に写真に撮影している事例などもいくつか存在する(図8参照)。もちろんアチックミュージアム全体の関心から、農具や民具そのものをアップで重点的に写真におさめている事例も一方で数多いが、そのみならずモノと人を一体として写真という記録に残しているのである。ここからは、服飾や農具というモノのみならず、それを使用・着用している状態と合わせて対象を捉えようとする視線が見受けられ、モノと人との関係性をトータルに記録に残そうとしている姿勢が見て取れると言えるだろう。

次にフィルムに目を向けてみると、この調査をもとに『台湾高雄州潮州郡下パイワン族の探訪

記録』(以下、『パイワン族の探訪記録』)というタイトルのアチックフィルム作品が製作されている。この作品も『十嶋鴻爪』と同様にタイトルや地図、字幕が付され入念な編集が施されている。映像の時間としても約47分と『十嶋鴻爪』に次ぐ長い作品となっている。この調査には渋沢が同行しておらず、少数の参加者の中でも映画に造詣が深かった宮本馨太郎がフィルムの撮影と編集を主に担っていたと考えられる。

このフィルム作品においてもいくつかの特徴が指摘できるだろう。まず第1に、行程地図を冒頭部分に差し挟み、地名などの字幕説明を入れながら、集落ごとにその遠景、近景から、

図8 パイワン族ライ社の畑に出る子ども (アチック写真 ア-73-10)



家屋の外観と内観、踊りなどの芸能、住民の人物映像、しかも生活場面ごとの服飾や道具を身にまとった人物映像、民具などのモノそのものとその製作過程というように、撮影する対象の焦点を明確にしながら、それを訪問した集落ごとに順を追って網羅的に記録・編集している点を挙げることができる。

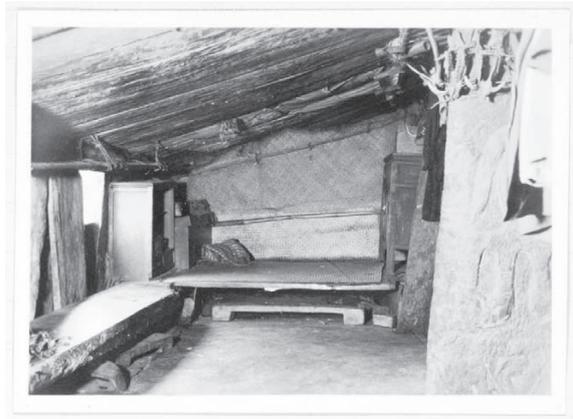
第2に、例えば山の急斜面で農作業をする人物を映す際に、地面すれすれからカメラを回してその迫力を映像で伝えようとするようなカメラワークの工夫が随所に見受けられることも指摘できるだろう。個人自らでも映画を撮影していた宮本の撮影映像であることがうかがえる。

第3に、動画フィルムの中に写真の静止画面像を差し挟みながらフィルムを編集している点である<sup>(39)</sup>。特に山地・溪谷の全景を遠方から映している場面や屋内の寝室部分における寝台や台所における料理用具などを映した場面の映像では、より詳細な映像となる静止画がフィルム映像の中に差し挟まれて用いられている(図9参照)。特に、スレート石を用い屋根が低いパイワン族家屋の室内撮影ではフィルムの撮影に十分なだけの光量がなかったものと推察されるが、そうした悪条件下においてさえも、寝台や調理用具などを写真静止画の利用によって正確に記録として残しているのである。そこには、寝台や調理用具というモノを、日常生活で使われている状態のままでも何とか工夫して記録に残しておきたいという強い意志が見て取れると言えるだろう。

第4に、写真に見られた特徴とも一致するが、人々が日常的に使用する民具、特に服飾のみならず農具なども含めたモノに着目しつつ、しかもモノそのものだけではなく、日常的に身につけられ、使用されている状況も含めてフィルムとして記録している点が非常に大きな特徴となっている。特に写真の静止画と異なり、動画フィルムの場合はモノを使用する人の身体動作の細部を余すところなく一連の動きとして記録する。例えば、フィルムの中のライにおける映像を挙げることができるだろう。ここでは、ライ集落の全景からフィルムのカットが始まり、次第にその中に小さく映されている杵をついている男性に焦点を合わせていく。そして次の場面では、女性2人が臼を杵でついている身体動作が詳細に映し出されていくのである(図10参照)。つまり、集落全体の環境の中におかれている杵と臼に注目し、それを使う人々の日常生活を焦点化しながら、具体的に動く身体動作の中に位置づけていくのである。ここには、取り巻く日常生活の環境の中にモノを位置づけ、モノのみならず、それを使う人の身体動作との関連の中でモノをとらえようとする視線が見て取れると言えるだろう。

第5に、上記の点と関連するが、民具を製作する過程を丹念にフィルム映像で追っていること

図9 アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』に使用された屋内寝室のアチック写真(ア-72-10-1)



(No.20 0:28:07)

図10 アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』に収録された臼を杵でつく女性



(No.20 0:43:01)

も特徴として挙げることができる。特にリナイと呼ばれる笠を編む男性や糸を紡いでいく紡績作業をしている女性の姿などを長い時間を使って丹念に追いかけている<sup>(40)</sup>。こうした点は、民具というモノを作りあげる人の身体動作を動画として記録することによって、ここでもモノと人の身体との関係性に着目する視点を重視していることの表れとして考えられるだろう。

#### 4) 2つの調査とビジュアル映像資料

本章の最後に、薩南十島と台湾パイワン族の調査・映像を簡潔に対比しながら改めて概観しておきたい。

まず、薩南十島と台湾パイワン族の双方に共通・類似する点である。アチックミュージアムの調査・映像全体に言えることではあるが、薩南十島では離島、パイワン族では山地という双方共に中央の都市部ではなく地方の辺境部に焦点を合わせて調査におもむき、その生活と文化を丹念に記録にとどめているという点が共通・類似していると言えるだろう。また、双方共に現地に住まう一般の人々の日常的な生活に注目し映像として記録に残そうとしている点も共通している。

その他、双方においてやはり民具をはじめとするモノに焦点を当てて調査・撮影している点が見取れるだけでなく、それを使用している環境や人との関係の中でモノに着目している姿勢もうかがえる<sup>(41)</sup>。また、特に動画フィルムにおいては無声ではあるものの、訪問した調査地においてそれぞれの民俗芸能に着目し、身体動作をあますところなく記録にとどめている点も双方に共通する視線であろう。フィルムの撮影・編集という点でいえば、調査行程の順を追って必要事項を整理しながら収録し、地図や字幕を付しながら分かりやすく作り込んだ映像作成が行われているという点も共通・類似点として挙げることができる。

次に、薩南十島とパイワン族の調査・映像における相違点も合わせて簡潔に整理しておきたい。まず、双方共に地方の辺境部に着目してはいるが、薩南十島においては島嶼・海域地域であったのに対し、パイワン族では山地地域となっている。この点は台湾原住民の調査が当初は島嶼部の計画も存在していたことを考え合わせると大きな相違とは言い切れないかもしれない。

むしろより大きな相違は調査の規模と参加者である。薩南十島調査では、船を借りあげた大規模な共同調査で洪沢本人も参加していた調査だったのに対し、パイワン族では実質3名という小規模な調査で洪沢本人も参加していない。このことを反映して、薩南十島では島民を挙げて歓迎行事が行われていた様子が記録され、披露された芸能や民具も事前に準備されていた様子うかがえるが、パイワン族の調査では特に大々的な歓迎や事前の準備が行われていた様子は見受けられない。かといってパイワン族の調査でも、住民らの協力が得られなかったわけでは全くない。パイワン族調査では、住民等の協力を得てそれぞれの集落に宿泊して滞在しながら、民族衣装をまとった姿の撮影や家屋内の撮影、農作業や民具製作過程の映像など、むしろ薩南十島よりも日常的な生活の実態をプライベートな空間に至るまで記録に残しているのである。歓迎・協力の性格が異なっているだけと考えることができるだろう。

薩南十島とパイワン族調査のもうひとつの大きな違いは言葉の問題である。つまり、パイワン族の調査では現地住民との意思疎通において言葉の問題が横たわっていた。宮本と小川のアチック同人のみではパイワン族の調査は不可能であっただろうが、その問題を解決したのが現地の言葉と事情に通じていた鹿野の存在である。台湾総督府関係の支援があった可能性も高いが、鹿野の存在があってはじめて現地住民の協力が得られる調査が可能となったと考えられる。

さらに、2つの調査における映像という観点から考えてみると、双方共に民具とそれを使用する環境や人にも着目して撮影していた点は共通しているが、より細部に着目すれば、異なっていると

考えられる点も指摘できるだろう。つまり、薩南十島では短時間の滞在の中で、民具を調査・記録するという必要性から事前に準備されていたモノを記録する場面が多いのに対して、パイワン族調査では宿泊・滞在しながらの調査だったことも反映して、モノを実際に使用している日常的な場面や、モノを作成する過程の映像を丹念に撮影し記録として残している。この点は、他のアチックフィルムにおいては民具の製作過程に着目している作品も多いことを考えると、薩南十島調査時には時間的制約のためそれがかなわなかったためと考えられるだろう。

#### 4. 現地上映会という方法

前章までの2と3では、本共同研究が対象としたアチックフィルム・写真の概要と、特に注目した薩南十島調査、台湾パイワン族調査との関連を確認してきた。そこで本章では本共同研究がこうしたアチックフィルム・写真を対象としてどのような調査研究を行ってきたのかを紹介・検討する。中でも中心的な調査方法として試みてきた現地上映会という方法の具体的な事例をいくつか検討したい。

##### 1) 共同研究の試み

先述したように本共同研究では、映像資料の文化資源化／社会化の可能性を探るという課題と、「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」に関連する問題を考えるという2つの課題を念頭に置いてきた。

この第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する研究に着手するにあたって、まずは前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が欠かせない。そのため本共同研究では、国際常民文化研究機構全体の情報共有化事業と連携しながら、まずは映像資料の整理という作業に重点を置くこととしたのである。その上で、共同研究の調査期間が3年間という時間的な制約を考慮して、アチックフィルム・写真の全てではなく、地域を限定して重点的な整理・調査研究を進めることとした。そこで選択されたのが薩南十島と台湾パイワン族に関連する映像資料であった。本共同研究では、この選択された2つの映像資料を核にした多岐にわたる多角的情報を統合的に整理するという文化資源化／社会化の可能性を探ろうと試みたのである。

ここではまず、この多岐にわたる情報を統合的に整理するという方法に関して、具体的なイメージを説明しておきたい。ここで念頭に置く多岐にわたる情報とは、大きく分けて5つのグループに分けられる。つまり、(1) アチックフィルム・写真の映像資料を出発点として、(2) 映像に関する目録、(3) 当時収集され現在残されている民具などの収集品、(4) 当時の調査団が残した文献・文字資料、(5) 現地上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報などである。本共同研究では、対象とする映像を限定しながら、これら5つの情報を統合化して集中的に整理しようと試みてきた。つまり、映像を核にしながら多様な情報を盛り込んだより厚い記述の資料とし、今後の研究を支える柱となることを期待したのである。

まず、(1) アチックフィルム・写真の映像資料とは、常民研が所蔵する資料を中心とするフィルムと写真そのものであり、研究対象の起点となるべきものである。次の(2) 映像に関する目録とは、特にアチック写真に関して機構全体の情報共有化作業で進められてきた本目録化へと至る一連の資料である。また、薩南十島関連のみに限られるが、本共同研究の成果として出版した叢書[資料編]の写真本目録増補版や、フィルム『十嶋鴻爪』の階層化されたタイム表などもここに加えることが可能だろう。

また、(3) 当時収集され現在残されている民具などの収集品とは、当時のアチックミュージアム調査団によって現地で収集され、現在は主に国立民族学博物館に収蔵されている民具などの収集品(モノ)である。フィルムや写真の映像に記録されているモノと現在残されている収集品(モノ)の対応関係を調査し、多様な情報整理データの一部に組み込もうと考えたのである。この資料整理の成果として、薩南十島の口之島と中之島に限定してではあるが、叢書[資料編]に「国立民族学博物館の標本資料との照合」を掲載した。

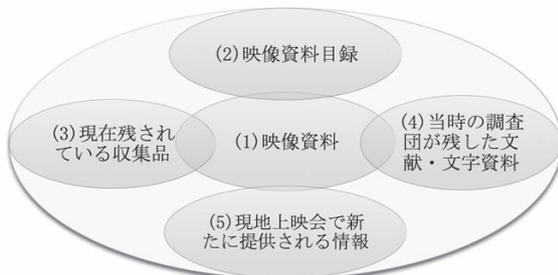
次の(4) 当時の調査団が残した文献・文字資料とは、当時の調査に参加した人々が、調査当時に文字資料としてまとめたと考えられるもの、また調査後に活字にした文献・文字資料などを含む。調査後に活字にされた文献としては、薩南十島調査に限定してみても小川(1935)、高橋(1934)、早川(1934)、三宅(1934)などが見受けられる。

またここで注目しておきたいのは、『十島雑綴』という手書きの資料集である。この資料集は今回の共同研究を進める過程で、宮本記念財団<sup>(42)</sup>に所蔵されているとの情報を寄せて頂き、実際に見せて頂いたものである。内容は、当時の薩南十島に関連する現地の基礎資料で、地理的な人口・面積や天候から行政的な制度とその変遷、婚姻・出産・死亡に関する記述、産業や歴史の概略、神社や宗教、芸能の概要にいたるまで多方面にわたって網羅されている。手書きでガリ版刷りされたものが表紙にくるまれて冊子形態として残されている。行政的な統計資料も中に含まれ、手書きの筆跡が統一されていないことなどから、アチック同人等の十島調査にあたって現地の行政組織の協力を得て基礎資料を事前に提出してもらっていた可能性が考えられるだろう。また、アチック同人等が行政組織などから提供してもらった基礎資料をまとめて文字資料として整理していたとも考えられる。いずれにせよ、調査前後に基礎的な文字資料を用意していたということは確かであろう。

最後の(5) 現地上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報とは、本共同研究で、戦前に撮影された映像の上映会を現地で開催し、集まってくれた住民から新たに提供してもらう独自の関連情報である。

上記5つの多岐にわたる多角的情報を含みながら、統合して整理する試みを本共同研究では試行してきたと言うことができるだろう。この試みを概念的な図で表すと図11のようなイメージとなる。またこうした試みは、多くの情報を参照する必要と現地上映会という調査を必要とするため、

図11 映像資料を核にした多角的情報の統合的整理のイメージ



出所：筆者作成

対象とする映像の地域を選択・限定して進める必要があった。その限定して着手された地域の映像が薩南十島と台湾パイワン族であり、特に薩南十島の資料整理・研究を重点的に進めることによって、他の映像調査の今後に向けたパイロットケースとなることを意図したのである。

そこで本章の以下では、調査のポイントとなった薩南十島と台湾パイワン族に関連する現地上映会という方法に関して具体的な事例を示しながら検討したい。

## 2) 鹿児島県十島村での現地上映会

本共同研究では、薩南十島調査のアチックフィルム・写真に関連する現地上映会・調査を計3回行った。その第1回目は、2010(平成22)年3月22-25日における鹿児島県十島村立口之島小中学校ならびに十島村役場における現地上映会と調査である。特に十島村教育委員会の協力を得て、

3月23日午後には口之島小中学校体育館での上映会を開催した<sup>(43)</sup>。小中学校の生徒や教員以外にも村の住民の方々が数多く駆けつけ、島民の半数近い50名ほどが映像を見て当時やその後の情報を寄せてくれた(図12参照)。子供や高齢の島民も多くおり、フィルムと写真の上映会は2時間半以上に及んだにもかかわらず、多くの方々が初めて目にする約76年前の映像に多大な感心を抱いていた。中には、幼少期の本人が写真に写っているという事例も見つかり、本人にとってもこれが唯一の幼少期の写真になるとのことだった。

また、口之島では小中学校体育館での上映会の他、高齢のため会場に来ることができなかった島内で最長老の1人の方に、翌日の3月24日に自宅で映像上映を行い、重点的な聞き取り調査を行ったほか、鹿児島市内の十島村役場でも、村長ほかの方々にも映像を見てもらい、聞き取り調査を行うことができた。

同様に翌年2011(平成23)年3月18-21日には、十島村中之島で映像の現地上映会と調査を行った。特に3月19日午後には、十島村教育委員会の協力を得て、十島村役場中之島出張所で映像の上映会を開催した(図13参照)<sup>(44)</sup>。こちらの上映会も盛況で島民約70名弱が集まり、貴重な情報を寄せて頂いた。中でも現在、中之島で保存継承活動が行われている島の民俗芸能(踊りや狂言)に関する当時の映像には、多くの島民の方々が見たこともないようなかつての姿もフィルムに記録されているとのことで、改めて非常に貴重な映像であることが再確認されることにもなった。現地で民俗芸能の保存継承活動をしている方からすると、これまで実際には見たこともない島の芸能が、このアチックフィルムには身体的動きの細部まで記録されており、そのまま模倣すべき手本ともなり得るとの認識であった。

さらに2012(平成24)年3月26-29日には、前2回の現地上映会を受けて、さらなる追加の聞き取り調査を口之島ならびに中之島で行った。特に前回までの上映会で情報を寄せてくれた人々に重点的に映像を再度見てもらいながら確認の聞き取りを行った。

ここではまず、上記の現地上映会と聞き取り調査の方法に関して、以下5点ほどで概要をまとめておきたい<sup>(45)</sup>。まず第1は、上映会の開催に先立って、現地へ協力を依頼し開催場所を確保する必要があるという点である。今回は、十島村教育委員会の協力を得て、口之島小中学校の体育館と中之島の役場出張所という公的な施設を利用させてもらうことができた。また、村内の島内放送を利用して事前に上映会の開催を案内して頂いたため、多くの住民に集まってもらうことが可能となった。

第2は、現地上映会ではそれぞれ『アチック写真 vol. 2』(口之島)、『アチック写真 vol. 4』(中之島)という写真集を冊子にして作成し、事前に住民の方々に届けておいてもらうことができたという点である。事前に配付した冊子には、それぞれの写真に仮の題名やアルバム台紙に書き込まれ

図12 鹿児島県十島村口之島小中学校での現地上映会(2010年3月23日)



撮影：高城玲

図13 鹿児島県十島村役場中之島出張所での現地上映会(2011年3月19日)



撮影：因琢哉

た当時のメモもあわせて記載したほか、各写真に関する質問も掲載した。この冊子を上映会でも使用し、情報を寄せてもらう便に供することができた。

第3は、動画フィルムの上映方法に関する点である。今回は、それぞれ体育館と役場出張所という比較的大きな施設でプロジェクターを利用してスクリーンに映すという方法をとった。但し、フィルムには音声が含まれないため、こちらで適宜解説を加え、途中で動画を静止させながら関連する質問を投げかけていった。

第4は、上映会の様子を如何に記録するかに関する点である。今回の現地上映会の様子は、新たにビデオカメラで撮影し、住民の方々がどのような情報を寄せ、どのように映像に接するかを動画として記録するという方法をとった。但し、特に前2回の上映会では数十名以上の多くの方々が広い会場に集まっているため、全ての会話や状況を映像や音声で拾うことは難しい。会場では、着席している隣や前後で当時の映像に関する語り合いが至るところで始まる様子が見受けられたが、設置したカメラの位置などによって死角が出た部分もあった。1回目の口之島でのこの反省を受け、2回目の中之島の上映会では、カメラの数や位置を改善し、会場の各所にICレコーダーを配置してより多くの会話を拾うよう心がけた。

第5に、こうした比較的大規模な上映会を現地で開催し、そこで寄せられた情報を新たにビデオカメラやICレコーダーで記録するには、開催する側にもそれなりの人手が必要となることも指摘しておきたい。従って、現地上映会を開催する際にはできる限り共同研究班全体で取り組み、上映会の各所で語られる映像に関する感想や情報を最大限漏らさずに記録・収集するように心がけたのである。

次に、現地上映会という方法において、具体的に島民がどのような反応を示したのかについて、特に口之島での上映会の4つの事例を紹介し検討したい<sup>(46)</sup>。

#### (1) 事例1

まずは、2010（平成22）年3月23日に口之島小中学校体育館で行われた現地上映会の事例である。以下は1934（昭和9）年当時のアチックミュージアム調査団が口之島の砂浜に上陸する場面の動画フィルムを目にした現在の島民らの反応である。

島民女性1「へえー、すごい。いやー、なんで？ 昔の方がよかー。ねえ。へえー。何で砂浜が・・・

あの浜の近くにあって、波が寄せて来なかったの？ 小屋？ あれ。民家でしょ」

島民女性2「民家やなくて、小屋やて」

島民女性1「え？」

島民男性1「漁に行く衆の小屋やて」

島民女性2「ほにゃ」

島民女性1「へえー。・・・昔の生活はいいなー」

このやりとりで、戦前の島の様子を初めて目にした女性1は、「へえー」という感嘆詞を何度か繰り返して素直な驚きを示している。その上で、現在の港と比較して、「昔の方がよかー」との感想を表明している。また、フィルムに映っている砂浜の「漁に行く衆の小屋」に関して、女性1はその存在さえも知らなかった。ここでは、フィルムを介して、島民の間でかつての島の状況に関する語り合いや伝え合いが行われ、記憶が共同／協働で継承されていく過程が見て取れると言えるだろう<sup>(47)</sup>。

## (2) 事例 2

次は、同じ口之島小中学校の上映会で、フィルムの民俗芸能の場面に関して島民男性 2 が疑問をさしはさむところである。

島民男性 2 「この、いま止めてもらってですよ。これ、足の履いているやつを分かりますか？ 地下足袋なのか？」

映像を止めて、確認。

島民女性 3 「地下足袋。あー、あー、地下足袋」

島民女性 4 「地下足袋」

島民男性 2 「今は裸足なんです。素足なんです。当時は何か履いてるもんだから」

島民女性 5 「このじいちゃんが言うには、こん時は偉い衆が来たから、撮影の為に地下足袋履いたんじゃないかって。今、履いてないもんね」

このやりとりでは、民俗芸能を演じる当時の男性が履いている履き物が話題になっている。当時のフィルムでは何か履いているのが確認されるが、今は裸足で踊りを踊るというのである。男性 2 はフィルムを止めて確認したいほど、注意深く関心をもってこの映像を見ている様子がうかがえる。フィルム撮影当時には、特に焦点化されていなかったと考えられる映像細部の履き物が、時を経て注目されているのである。こうして、焦点化されていない細部をも漏らさず映し出すフィルム映像を、上映会で現代の島民が同時に共有することによって、民俗芸能の履き物という細部の具体的なことをめぐる語り合いと意見の交換がこの場で喚起されたとと言えるだろう。

## (3) 事例 3

この事例も、口之島小中学校におけるフィルム上映会の民俗芸能に関する場面に対する島民の反応である。口之島の芸能として 1934（昭和 9）年にアチックミュージアム調査団に披露された男性 1 人による弓を使った狂言の場面（図 5 参照）をフィルムで目にした島民らは、この狂言は夏の盆に現在でも青年団が演じているものであるとの情報を寄せてくれた。

その際、かつて演じられた狂言の身体動作をフィルムで目にした男性が、現在の狂言を実際に演じてくれることとなった。弓の代わりに体育館の棒を手にした男性は、先輩から継承され身体に染みこんだ狂言の動作をスムーズに演じてくれた。男性はフィルムを初めて目にしたにも関わらず、その動作は約 76 年前のフィルムに映し出されていたものとはほぼ同じものであった。さらに、フィルムには収録されていない狂言の中の口上の一部をも付け加えながら一連の動きを演じてくれたのである。

ここでは、フィルム映像に動きを伴って記録されていた身体が、76 年の時を越えてこの上映会の場の身体と共鳴し、現在の狂言という民俗芸能の身体動作をこの場所に再現させることとなったのである。この事例は、フィルム映像が時を越えていま—ここで反応する身体動作を喚起する媒介となり得ることを示唆していると言えるだろう。

## (4) 事例 4

最後の事例は、高齢のため体育館での上映会会場に来ることができなかった島内で最古老の一人に、翌 3 月 24 日に自宅で映像を上映し重点的な聞き取り調査を行った際のものである。

古老 「昭和 9 年で言うことは、・・・私が 14 歳ぐらいの時、今 90 で」

調査者 1 「覚えていますか？ この人たちが来たというのを」

古老 「これは、人、こんな来ないでしょ。ここに写真ありますけどな、分からない」  
(中略)

調査者1「これ、『としま』」

古老 「『としま』。ほう、これは…。これが、『第一としま』か、150トン、うちん『としま』は、『としま』と入りよると。入ってん？」

調査者1「ここに書いてある」

古老 「ああ、ああ、本当。『としま』入ってる」

調査者1「『としま』の『ま』が見えますよね」

古老 「うん、うん、…ほいで、そいでさっきのほら、お偉方が来た、そんな時にお盆のね、学校の庭だっけ見に行っけ。…ほら記憶がな、思い出してきた」  
(中略)

古老 「そんな時に青年の先輩の方々ね、お盆の踊りそのままをして、良かった。今でも記憶に残ってる。そいで、そんな時お偉方が来たときに、『これは一、いいぞ』って褒められたん(笑)、うん」

この場は、1934（昭和9）年にアチックミュージアム調査団が島を訪れた当時14歳だった島の古老に当時の映像を見せながら話を聞いている場面である。当初は、「写真があるけど、分からない」としていた古老が、話しながら映像を具体的に見ていくうちに当時の記憶を呼び戻していく過程が見て取れる。当時就航したばかりのとしま丸の映像を具体的に目にしてから、150トンという細かな数字までもが思い出されるほど、当時の記憶が口をついて出てくるのである。ここでは、当初「分からない」としていたものが、映像を介して「今でも記憶に残っている」という状況にまで変化している点に注目したい。写真や動きを伴った動画フィルムは、そうした埋もれている記憶を掘り起こす潜在的力を有していると考えられるのである。

なお、この古老は聞き取りの後、既に他界してしまっている。映像が撮影されてから80年あまりもが経過した現在、当時のことを記憶している人々が存命である確率も年々減少していくと言えるだろう。その意味でこの事例は、現地上映会を開催して当時の情報を得るという方法が急務となっていることを示唆する事例とも考えられるのである。

### 3) 台湾屏東県での現地上映会

本共同研究では、台湾パイワン族のアチックフィルム・写真に関連する現地上映会・調査を計2回行っている<sup>(48)</sup>。

まず第1回目は、2010（平成22）年12月26-29日に、約73年前に映像が撮影された現在の屏東県泰武郷、瑪家郷、三地門郷で行った現地上映会と調査である。12月27日には、屏東県泰武郷公所で80歳を超える村在住の老人数名に集ってもらい、プロジェクターで映像を映しながら上映会と聞き取り調査を行った。また同時に、泰武郷や瑪家郷パクヒョウの山中にあるパイワン族旧集落跡を訪問、現地の景観を確認しながら映像資料の調査を行った。他にも、元泰武郷長宅と瑪家郷に居住するパイワン族頭目の末裔者宅を訪問し、その個人宅でそれぞれ近隣在住の老人数名に集ってもらい、当時のアチックフィルム・写真の上映調査を行った。なお、これら個人宅で現地上映会を行う際には、プロジェクターなどの大画面で一同に見てもらおうような設備がなかったため、持参したパソコン上の画面や印刷した紙媒体の写真資料を利用しながら2-3人の小グループごとに調査を行うこととなった。

次の第2回目は、2011（平成23）年12月16-20日に1回目と同じ地域で現地上映会と調査を行っている。特に12月18日には、屏東県三地門郷の台湾原住民族文化園区内会議室にパイワン族頭目の末裔等5名に集まってもらい、映像の上映を中心とする聞き取りを行った。また翌日の12月19日には、前年と同じ会場の屏東県泰武郷公所に近隣のパイワン族住民約40名に集まってもらい、プロジェクターを利用しながら比較的大規模な上映会と調査を行った（図14参照）。

図14 台湾屏東県泰武郷での現地上映会  
(2011年12月19日)



撮影：高城玲

パイワン族関連現地上映会の開催方法に関しても簡潔に要点をまとめておきたい。まず、泰武郷公所や台湾原住民族文化園区といった施設で行った上映会では、プロジェクターを用いて多くの人に同時に映像を確認してもらうことができた。薩南十島関連の上映会と同様に動画の場合は途中で映像を一時停止させながら、スクリーンに映し出された画面の詳細について会場の人々に随時質問を投げかけながら聞き取りを進めた。また、薩南十島関連の上映会と同様に、数は限られるが上映会調査の様子をビデオカメラで新たに撮影し記録にとどめた。

このように薩南十島の上映会に準じるような形態をパイワン族でも理想としたが、他方でこのパイワン族関連の上映会調査では十分に手を尽くせなかった点もいくつか指摘しておかなければならないだろう。まず、最も大きな問題は調査を行う際の言葉の問題である。現地住民への聞き取り調査に際しては、パイワン語を主として中国語も必要となるが、今回の本共同研究への参加者に台湾原住民研究や台湾研究を主とする人はおらず、ましてパイワン語を話せる者が含まれていなかった。そのため調査に際しては意思疎通における言葉の問題を抱えることとなった。しかしながら今回の調査では、パイワン語と中国語、さらに日本語も堪能な現地在住の地元研究者から通訳の協力を得ることができたため、パイワン語・中国語と日本語の通訳を介して直接聞き取りを行うことが可能となった。それでも通訳を介し、その補足説明をしてもらいながら上映会調査を進めなければならなかったことは薩南十島調査時と大きく異なる点である。特に上映会に参加した住民らの間でそれぞれ個別に各所で交わされた感想や会話は、訳された全体の内容からは漏れており、十分にその詳細を拾いきれずに残されている。

また、パイワン族関連の上映会調査では、薩南十島関連の調査時のように、質問事項を記載したアチック写真の冊子を事前に配布した上で上映会に臨んでもらうということができなかった。そのため参加した住民らは、映像を会場に来て初めて目にする事となり、事前に記憶を反芻しておいてもらう時間的余裕が十分でなかったことも薩南十島関連の上映会とは異なっていたと言えるだろう。

次に、現在のパイワン族住民が現地上映会においてどのような反応を示したのかに関して、4つほどの特徴的な具体例を整理・検討しておきたい。

#### (1) 事例5

まず第1の住民側の反応として、2011（平成23）年の台湾原住民族文化園区での上映会の事例を紹介したい。集まってくれた老人の中に、アチックフィルムに収録されているリナイという笠を製作している男性が、自らの父親であると名乗り出てくれた男性がいたという事例である。撮影当時からすると、この時約74年を経て当時の父親の映像に接したわけである。後日の他の写真では

図 15 アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』に収録された蓑製作の場面（左）と台湾屏東県瑪家郷の個人宅現地上映会（2010年12月27日）で現在使用している手製の編み棒を示してくれた男性（右 撮影：高城玲）



(No.20 0:22:17)

父親のかつての姿に接したことはあるが、リナイを製作する身体動作を伴った当時の父親の動く姿は初めて目にしたということであった。

この時の男性が思わずもらした「父親が生きている」という言葉は印象的である。今は亡き肉親の動く姿を現在においてフィルムで目の当たりにすることは、この男性に生きている父親の姿を喚起させ、肉親に関する新たな記憶と思慕を刻み込んでいくことともなっていくのである。かつての映像にとらえられていたこの男性の父親は、上映会への他の参加者もかすかに見知っていた男性であり、74年前のリナイを製作する姿にこの場で同時に接したことになる。この息子が上映会の場でもらした父親への思慕は、他の参加者にも共有されて、今は亡き自らの肉親への思慕を改めて深めていく契機ともなっていたと考えられるだろう。

## （2）事例6

第2に、約74年前のアチックフィルムや写真に映し出されている民具とほぼ同じモノを現代の現地の人々も使用しており、現在使われているモノを実際に持ち出して示しながら説明をしてくれた事例を挙げることできる。2010（平成22）年における瑪家郷に居住するパイワン族頭目末裔者宅での上映会調査では、フィルム『パイワン族の探訪記録』に描かれた蓑製作で使われていた特徴的な木製の編み棒を見て、ある男性が現在でも使用している手製の編み棒を部屋から持ち出して実際に示してくれた（図15参照）。

また、フィルムと写真双方に記録されている服飾を身にまとった人物映像を目にした上映会へのある女性参加者は、近くの自宅まで戻り、映像で背中に背負われているシカウとよばれる網状の袋と同じ現代のモノを実際に手にしながら説明してくれた。

このようにこれらの現地上映会という場所では、フィルムや写真で具体的なモノを見てもらうことで、言葉による詳細な説明を超えて、一見のうちに対象を認識し現代で使われているモノを同定して、その実物を示してくれるということが可能となっている。しかも、フィルム撮影当時の製作過程、使われ方に関して、特に動画フィルムにおいては細部の身体動作まで伴って時を経ても具体的に目にするのが可能となっている。動画フィルムでシカウを背負う様子を目にした上映会参加者は、こちらが何も求めないうちに、実際に現在のシカウを背負う動作を示し、現代での使用法を説明してくれることとなったのである。

具体的なモノの、それらが作られ使われる背景を含んだビジュアル資料は、言葉による説明を飛び超えて、それを見る人の認識と記憶に一瞬のうちに訴えかける事例としてとらえられるだろう。

しかもそうしたモノは、上映会に参加した現地の人からすれば、映像に示されているように自らの父母や祖父母が、手作業で丹念に製作したモノでもあり、それと同類のモノを現代でも引き継いで使用しているという情緒的な思い入れの対象となるモノでもある。上映会で映し出された約74年前のモノを目にしたある参加者は、昔から使われているモノにより愛着を感じ、大切にしなければと語った。上映会で映し出されたモノの映像は、そうした愛着という情動を喚起する契機ともなっているのである。

### (3) 事例7

第3の住民側の反応として、2011（平成23）年の泰武郷公所での40名余りもの上映会での事例を挙げるができる。アチックフィルム『パイワン族の探訪記録』に収録されている紡績作業という糸を手や足を使って繕りあわせていく場面を見ていた一人の女性が、立ち上がって上映会会場を後にした。そのまま上映会を続けていたが、しばらくして女性が細い糸状の繊維を手にして会場に戻ってきた。女性は、現在でも行われている糸状の繊維を繕りあわせて太い繊維束にしていく作業を実際に見せてくれるというのである。そこで、足の膝上と手を使いながら道具を使わずに手作業で繊維を繕り合わせていく現代の身体動作を再現してくれることとなった。つまり、映像に記録されていた身体動作のみならず、父母から教えられたという繊維を繕り合わせていくという同じ目的の身体動作を、現代において実際に目に見える動きを伴って再現してくれたのである。

この際にも、調査側から特に言葉を介して再現を求めたわけではなかった。女性は、フィルムという動きを伴った映像を目にしただけで、自らが教えられ身につけている同じ目的の身体動作を、同じように再現しようとしてくれたのである。ここでは、かつての作業過程を映した映像が、言葉を介さずにそのビジュアルな映像のみで、現代における同じ目的の身体動作を再現させる契機となる力を持っていることがうかがえる。

### (4) 事例8

第4の住民側の反応として、同じ2011（平成23）年泰武郷公所での上映会におけるもうひとつの特徴的な場面を紹介しておきたい。フィルム動画や写真にも収録されているパイワン族家屋の寝室にあたる場面の映像を見ている際に、参加者から男女の寝台の位置が決められていたという情報を寄せてもらった。その際に、男女が結びつくきっかけとして若い男女の間で交わされる掛け合いの民俗的な歌が当時は存在していたという話が飛び出してきたのである。

この話は上映会参加者の中でも老人らの関心を引いたらしく、40名ほど集まっている会場のあちらこちら隣前後同士で互いに語り合う様子が見られ、一時会場が雑然とざわついた。そこで、男女掛け合いの歌を教えて欲しいということになったところ、一人の男性老人が声高々に歌の出だしを歌い出してくれた。その出だしに唱和するかたちで、他の男性老人数名も歌の続きを引き取って歌ってくれと、続く女性が応じるパートに関しても、数名の女性老人が唱和してくれたのである。男女の歌の掛け合いが何度か続く内に、歌に唱和する人数が増えていき、最後は会場のほぼ全員が、同じリズムで身体的に同調・共鳴しながら、同じ歌詞を唱和して大合唱とまでなった。

これと同様のことは、狩猟の際の男性の民俗的な歌に関してもあてはまる。フィルム『パイワン族の探訪記録』に収録されている狩猟に出発する場面を見ていた際に、老人男性の一人が狩猟の際の歌を一部再現してくれた。ここでは、狩猟に出る場面で、映像には収録されていない歌の一部を現代に再現してくれたのである。

アチックフィルムは全て無声の映像だけの資料であり、これら男女の掛け合いと狩猟の際の歌の場面でも音声は収録されていない。しかしながら、そこには本来歌声や音声が存在していたはずである。上映会の参加者は、映像だけを目にしながら、本来そこに響いていたはずの映像に欠けてい

る歌声を、映像の臨場感をきっかけとして甦らせ、自らの身体を介して共鳴し、再現して見せてくれたのである。

同時に、そこではかつての映像を目にすることによって、自らを取り巻く過去の環境に関して、会場の隣前後同士で語り合い、思い出し合い、それを伝え合うという行為があちらこちらで引き起こされていたことも非常に特徴的だった。アチックフィルムと写真は、会場に集まった人々の間に、身体を介しながら共同／協働で語り合い、想起し合い、再現するという新たな行為を生み出す契機ともなっていたのである。

## 5. ビジュアル映像資料と現地上映会という方法の可能性

本稿では、アチックフィルム・写真の概要、中でも薩南十島と台湾パイワン族関連のビジュアル映像資料を紹介し、そうした対象に対して本共同研究で試みてきた現地上映会という方法の事例を検討してきた。最後に、アチックフィルム・写真という映像資料が保持している可能性、また現地上映会という調査方法が持つ可能性を探り、ビジュアル映像資料の文化資源化／社会化という議論の一面を考えてみたい。

### 1) ビジュアル・サルベージとしてのアチックフィルム・写真

まず、アチック調査におけるビジュアル映像資料の位置づけを今一度振り返って確認しておきたい。象徴的だったのはアチックフィルムの『十嶋鴻爪』というタイトルだった。当時、新たな航路就航などで跡形もなく消えてしまいかねない薩南十島の生活と文化を共同調査で余すところなく記録・救出しようとしたのが十島調査であり、しかもそれを文字資料のみならずビジュアルな映像資料としても記録・救出しようとしたと考えられるのである。

アチック同人の宮本常一は後日の回顧談として「渋谷先生から『鹿児島島の南の屋久島は、(中略)内地から多くの人が入り込むと古いことがみるみるうち壊されてしまうから、その前に一通り調べておくのが良いと思う』と言われた」<sup>(49)</sup>と書き残している。この回顧談は、必ずしも薩南十島調査を指してのことかはっきりとはしないが、薩南十島周辺の調査の必要性を、「古いことがみるみるうちに壊されてしまうから」その前に「調べておくのが良い」として指摘している。ここには、まさにサルベージ(救出)という意図が見受けられると言えるだろう。

関連して、1936(昭和11)年にアチックミュージアムから刊行された『民具蒐集調査要目』においては、「此種の貴重な資料が、急激なる生活様式の改変と共に日を追うて泯(ほろ)び行き再び目にすること能わざるもの多きを憶ひ、微力を顧みず之を蒐集しその標本の保存に努力して参りました」<sup>(50)</sup>と記されており、消えゆく民具を救出して保存するという方針が言明されている。渋谷敬三と今和次郎を比較した近著の丸山(2013)でも、渋谷やアチックミュージアムの民具収集に関して、「大量生産による工業製品が昔から伝えられてきた生活道具を急速に駆逐していくなかで、それらを救出するために立ち上げられたのがアチックミュージアムの民具研究だった」<sup>(51)</sup>としている。ここでも、急速に消えゆく中でのサルベージ(救出)という側面に着目している。

他方、特に1990年代の文化人類学の議論においては、自らの研究調査方法やその成果としての民族誌記述に関する反省や批判が向けられるようになり、その中で文化の救出を主とするサルベージ人類学への批判的反省もなされてきた。日本においても例えば、「近代人類学は文化が変化することをその消滅とみなし、世界各地の消滅しつつある文化を記述し、民族誌のなかに救出することを自らの使命とした」<sup>(52)</sup>として、サルベージ人類学を批判してきたのである。そこには、本来絶え

ざる相互作用の中にあるはずの文化を、その時点で救出することで、固定的、本質的なものとして設定してしまうことへの批判が向けられていると言えるだろう。

しかしその後、近年ではサルベージ人類学批判を再考する新たな動きも見受けられる。例えば清水（2006）では、「私はずっとサルベージ人類学はおかしいと言ってきたわけですが、（中略）非常に皮肉なこととして、一方で人類学者がサルベージ人類学で昔の姿を再現していた、その再現した姿を、当事者たちが自分たちの文化復興のひとつの材料として使っている、文化復興の道具としてサルベージ人類学も有効である場面もある」<sup>(53)</sup>としている。人類学者がかつて再現した昔の姿は、現地の当事者からみれば、現在の文化復興の道具として使える、そのように有効な場面もあるとして、サルベージ人類学批判を再考しているのである。

こうしたサルベージという視点への批判と再考は、アチック調査によるアチックフィルム・写真に関して、双方共に当てはまると考えられるだろう。つまり一面で、まさに消えつつある文化や民具を消滅の前に救い上げることで、その時点での文化を本質的なものとして固定してしまいかねない。しかし他方で、薩南十島調査で撮影された『十嶋鴻爪』の民俗芸能の映像は、現地で保存継承を行っている現在の当事者からすれば、これまで見たこともない島の芸能が、アチックフィルムには身体的動きの細部まで記録されており、映像がそのまま模倣すべき手本となり得る文化復興の大きな資源ともなるのである。ここでアチックフィルムがなければ、その民俗芸能の新たな復興も不可能となってしまうかねない。アチックフィルム・写真は、サルベージによる固定化への批判のみならず、現地にとっては復興という未来に向けた新たな動きへの有効で不可欠な資源として意味をもつとも考えられるだろう。

特にここでは、アチックフィルム・写真で救出されたものが、一般的な民族誌記述という文字を中心とする資料とは異なるという点にも注意を向けなければならないだろう。つまり、基本的に文字で記録される民族誌とは異なり、主としてビジュアルな映像資料である点が特徴的である。そこには、写真における撮影日時や撮影場所などに関する説明、フィルムにおけるタイトルや字幕説明など、文字資料も同時に含まれており、本共同研究でもそれ以外に文献・文字資料を総合的に資料整理に含めようとはしているが、おおもとの基本としてアチックフィルム写真はやはりビジュアルな映像資料である。そうしたビジュアルな映像資料による対象の記録、救出にはまた、民族誌記述とは異なった特徴も存在すると思われる。つまり、もちろん撮影対象の選択やそのアングルなど、撮影者などによる個別の差違は出てくるものの、主観的焦点が卓越する文字の民族誌記述とは異なって、ビジュアル資料では、焦点化しない背景をも同時に含みながら対象そのものをそのままに記録するという特徴が指摘できるのである。

こうしたビジュアルな資料によって対象を記録、救出することに関して、第二次世界大戦前における英領植民地期ビルマ辺境部の写真を分析した人類学者のデイビッド・オードーは「ビジュアルな救出 (visual salvage)」として注目している<sup>(54)</sup>。そこではまた、当時の写真を visual language of salvage と位置づけ、文字を主とする民族誌とは異なる、写真によるビジュアル・サルベージという方法の重要性を指摘しているのである。アチック調査全体における救出というひとつの意図の中に、アチックフィルム・写真を位置づけて考えてみると、まさにこのビジュアル・サルベージという方法と重なり合う部分が多いと考えられる。

## 2) ビジュアル映像資料の可能性

アチックフィルム・写真の特徴は、言うまでもなくやはりビジュアルという点であろう。上記でアチックフィルム・写真をビジュアル・サルベージという方法の中で考えたが、では、特に文字を

主とする資料に対してビジュアルという特性が持つ可能性はどこにあるのだろうか。これまでの文化人類学、民族学、民俗学において、やはり成果の主流は民族誌や民俗誌など文字による成果刊行物だったと言えるだろう<sup>(55)</sup>。映像人類学の民族誌映画やアチックフィルム・写真などは、その重要性を認められながらも、比較するとやはり広く一般的とは言い難い。しかしながら、文字にはないビジュアルという特性がもつ可能性がいくつか指摘されると思われる。アチックフィルム・写真というビジュアル資料が有する特性を考えるためにも、この可能性について整理しておきたい。

まず第1に、ビジュアルという点で、より多くの人々が分野を問わず共有しやすい間口の広さを挙げることができるだろう。文字による民族誌や民俗誌と比べると、映像は調査対象の人々にとっても近づきやすいものである<sup>(56)</sup>。場合によって文字を持たない社会の場合、自分自身に関する記述であるはずなのに、文字で書かれた報告書を彼らは読む手段を持たない。文字を持つ社会であっても、現地語以外の英語や日本語で書かれた彼ら自身の民族誌を現地の人々は理解できない。それに対して、ビジュアルというフィルムや写真は、文字や言語を問わず誰もが共有できるという特性を持っている。

この点に関連して、アチック同人であった宮本常一も文字資料だけの研究方法を批判していたという。彼自身も調査活動の中で自ら膨大な写真を研究に取り入れていったが、「文字を使ってきたのは、(中略)いわば表層社会の人たちで、その表層を支えたのは、文字を書き残さなかった基層社会の民衆ではなかったか。(中略)文字では残さなかった民衆の世界を記録するために、そして日本人の生活史が片手落ちにならないために、カメラを手にしたのだ」とその方法が紹介されている<sup>(57)</sup>。

ビジュアルという点での第2の特性として、意図しない、あるいは焦点化しない情報も同時に記録するという点を挙げることができるだろう。つまり、フィルムや写真においては、撮影する際に何らかの対象を捉え、映像に映している場合が多いだろうが、実はそうした意図し焦点化した対象そのものだけが切り取られることはあまり多くない。対象の背後にある背景やその場の雰囲気、フィルムの場合はその動くリズムまでも、意図し焦点化していないにも関わらず、忠実に記録し映し出すこととなるのである<sup>(58)</sup>。

この点は、また文字による民族誌・民俗誌と対照的である。つまり、個々の関心によって焦点化され意図された文字による記述に対して、ビジュアルは意図した焦点を超えて、偶然に別の対象をも射程に入れて忠実な記録として残すのである。この点に関連して、箭内(2014b)は書物と対比しながら「人々や人々が語る言葉だけでなく、それを取り巻く事物をも同時に提示する映像というメディアは、社会的宇宙をその周囲の事物から切り離さないで、社会—自然的宇宙に即した形で思考することを、書物におけるよりも容易にする」<sup>(59)</sup>と指摘している。

また、意図した焦点を超えて、その背景もが忠実に記録に残されるというフィルムや写真は、調査対象に対する調査者側の視点や思考を揺さぶりかけるということもあり得るだろう<sup>(60)</sup>。調査者側が意図し焦点化した対象への視点を、意図しない偶然の映像記録が相対化し再考を促すことにもつながり得るのである。

事例に沿って考えてみよう。口之島現地上映会の事例2では、民俗芸能を記録していた映像の中で、特に撮影時には意識していなかったと思われる踊り手の足袋が、現在の住民にとって非常に気になる焦点となっていた。ここでは、意識化・焦点化されていなかった足袋という細部が、映像に図らずも記録されていたことによって、新たな関心と視点・思考を現在において新しく生み出していると考えられることができるだろう。

ビジュアルにおける第3の特性は、第1に関係するが、物理的にフィルムや写真が破損しない

限り、時間や空間、言語を超えて、繰り返し再生・再現可能だという点である。この点は、文字資料や言語を中心とする言語中心主義や語彙主義と大きな対比をなしている。たとえ約 76 年前の遠い薩南十島の映像であろうと、ビジュアル資料は、当時の姿をそのまま今この場所の現前に再現してくれる。また、台湾のパイワン族の場合には、言葉という大きな差違も超えて、当時の映像がそのまま見る相手の情動に訴えかける存在となるのである。しかも、それを繰り返して何度も再生し、じっくりと見ることができるという特性をあわせ持っている。

これまでの 3 点を総合して、最後の第 4 の特性として指摘しておきたいのは、ビジュアル資料が、時空間や言語を超えて共有可能な特性を持つことによって、現地の住民を含めたより多くの人々が、同時に映像を見るといういま—ここでの経験を共有する媒介ともなり得るという点である。こうしたビジュアル資料の特性や可能性を背景に、本共同研究ではアチックフィルム・写真の現地上映会という方法を試行してきたと言えるだろう。

### 3) サルベージからフィードバック、そして共有へ—現地上映会の可能性

そこで次には、現地上映会という方法が有する可能性についてまとめながら改めて検討したい。本稿の 4 で具体的事例を紹介した現地上映会という方法は、上記のビジュアル・サルベージという文脈に位置づけて考えてみると、アチックミュージアム調査団によって救出されたビジュアルな映像資料を、時を越えて現代の現地の人々に見てもらおうということである。それは、救出されたビジュアル資料を現地の人々にフィードバックし、共有してもらおう試みと言い換えることもできるだろう。

この点に関連して、映像人類学という分野を先導してきたフランスのジャン・ルーシュは、「私にとっていちばん大切なことは、(中略)いわゆる『フィードバック』をすることです。それは映画を、撮影した相手に渡し、見せることです。文字を持たない第三世界の人たちに、自分自身の尊厳の証拠を与えることができ、自分たちの考えていること、思想に気づくのみならず、自分たち自身の運命は自分たちのものだということに気づくという、そういうきっかけを与えることだと思うのです」と述べている<sup>(61)</sup>。現地の人々にビジュアルなものでフィードバックすることの重要性が指摘されている。

本共同研究で試みてきた現地上映会も、かつてアチック調査において救出されたビジュアルな映像資料を、現地にフィードバックする試みのひとつと捉えられるだろう。しかも今回試みた現地上映会は、現地のより多くの人々に呼びかけ、研究者のみならず現地に居住している老若男女を問わない人々の間で、時を経た映像資料を現代において同時に共有する機会ともなっていたと考えられる。

特に鹿児島県の口之島や中之島、あるいは台湾の屏東県泰武郷で行われた上映会は、40 名から 70 名余りもの現地の人々が一堂に会して同時に映像を見るという共有の場所となっていたのである。具体例を振り返ってみよう。口之島小中学校で行われた上映会事例 1 では、約 76 年前の映像を初めて目にした人々が、会場の各所、隣同士や前後でかつての島の状況に関する語り合いや、伝え合いがさかんに行われていた。事例 2 でもかつての民俗芸能における履き物という細部に関して、映像の一時停止を求めてまで確認し、語り合い、意見を交換する行為が繰り返りひろげられていた。また、台湾屏東県での上映会事例 8 では、映像資料を見ている過程で話題となった男女間の掛け合い歌に関して、会場が雑然とざわつくほど、各所で語り合い、情報を伝え合う場所となっていた。

また、映像を同時に見るという現地上映会での過程では、身体的な共鳴や、愛着と言った情緒的な感情の共有など、言語を介在させる思考が働く以前の身体的、情動的な経験の共有という場面も見受けられたと言えるだろう。

例えば、口之島上映会の事例 3 では、フィルムに映されていた狂言の場面の身体が、上映会に参加していた男性の身体と共鳴・共振し、その同じ身体動作をその場で再現、披露してくれることとなっていた。また、パイワン族のフィルム上映会事例 8 では、狩猟に出発する場面に身体的に同調・共鳴し、かつて歌われていたという狩猟の際の歌を、映像には収録されていないにも関わらず、上映会の場で歌い出す人が現れたのである。

身体の共鳴による経験の共有のみならず、上映会の場では、情緒的な感情の共有と考えられる場面も見受けられた。まず、上映会に参加した本人の父親がフィルムに映し出されていたパイワン族上映会の事例 5 を挙げることができるだろう。そこでは、父親のかつての動く映像に接した男性が思わずもらした思慕の思いが、他の参加者にも共有されて、今は亡きそれぞれの肉親への思慕を改めて深めていく契機ともなっていた。また、同じパイワン族上映会の事例 8 では、男女が結びつくきっかけとなる掛け合いの民俗的な歌を、上映会での映像をきっかけに、会場の参加者全員で大合唱するまでになっていた。そこでは、集落や家屋の古い映像を目にすることをきっかけとして、自分自身の若い頃の経験や感情を懐かしんで想起し、その情緒的な感情を、男女掛け合いの歌を共に歌い合うことで共有しながらなぞっていく過程が見て取れるのである。

このように、映像そのものを共有する現地上映会の過程では、言語化される以前の身体的同調や共鳴、情緒的な感情の共有なども同時に見受けられたと言えるだろう。この共有の過程に関して、箭内は「映像が引き起こす共有のプロセスは、文字メディアのそれよりもはるかに直接的で、反省的思考が働く以前に始動するものである。それが映像の力であり、可能性であり、危険でもあるのだ」<sup>(62)</sup>と指摘している。つまり、本稿の事例では、現地上映会で引き起こされる反射的・直接的で根源的な経験の共有という側面が見られたことを示唆しており、それが映像を共有することで、身体や感情をも共振させるという現地上映会の保持するひとつの可能性となっていくと考えられるのである。

現地上映会という方法が保持する共有という可能性についてまとめておこう。ここではいくつかの共有という可能性が指摘された。まず、現地上映会において、ビジュアル資料そのものを同時に見るという共有がある。その最初の共有を媒介として、次なる共有の可能性が立ち現れてくるのである。上映会の場所では、かつての映像に関する現在の現地住民の間で様々な語り合いや伝え合いが活発に行われることとなった。この場は、現地住民の間でかつての記憶を呼び起こし、互いに語り・伝え合うという新たな経験の共有の場所ともなっていた。また同時に、映像の共有を介して、身体的動きや情緒的な感情をも共振させ、共有するという場所ともなっていたのである。

つまりこの場所は、かつてサルベージされた生活文化のビジュアル資料を、時と場所を同じくして物理的に共有するというにとどまらず、ビジュアル資料を同じ時と場所で「見て・読み」、「語り・伝え合う」という経験を共有する場所、また身体的動作や感情までもが共有される場所ともなっていくのである。いわば現地上映会は、ビジュアル資料としてのサルベージから、それにとどまらず映像そのものの共有による現地へのフィードバック、そしてその先に経験・身体・感情の共有へと向かう転換のポイントとも位置づけることができるだろう。

## 6. おわりに

アチックミュージアムの調査研究から経済面に至るまで、あらゆる側面においてその活動のまさに要であった渋沢敬三は、かつて 1937 (昭和 12) 年に刊行された『豆州内浦漁民史料』の「序」において、「論文を書くのではない、資料を学界に提供するのである」との有名な言葉を記してい

る<sup>(63)</sup>。また、1941（昭和16）年の社会経済史学会大会においては「理論づける前にまず総てのものの実体を掴むということが大変大切ではないかという風に考える」と所感を記している<sup>(64)</sup>。ここにみられるように、渋沢はまず実体をつかむ基礎となる資料を網羅的に整備し、それを研究者などの学界に広く開いていくことを重要視し、その生涯でも多くの資料集を刊行することで、研究の礎を築くことにも精力を傾けてきたと言えるだろう。ここには、基礎となる資料を整備し、それを学界に開いていくことで共有するという基本的な思想が根付いていたと考えられる。いわば、資料の文化資源化とそれを広く社会に開いて共有していく社会化の思想とも言えるだろう。

本共同研究における現地上映会という方法も、まさにアチックフィルム・写真というビジュアル資料を可能な限りで現地にフィードバックし共有しようとするひとつの試みであった。網羅的に基礎的な資料とするまでには至っていないが、渋沢の思想の延長線上末端に、上映会において映像資料を現地と共有できればとの思いは当初からあったと言えるだろう。それがどこまで達成されたかは、外部の判断を待たなければならないが、他方で、共有された資料がビジュアルという特性もあり、現地上映会による資料の共有には当初意図していなかった新たな可能性も見いだされたと考えられるのである。

新たな可能性の第1は、かつて渋沢が言っていた「学界に資料を提供する」という枠を超えて、地域社会全体に対して、つまり、現地住民を主とする老若男女、職や学を問わない多くの人々一般に対して上映会で映像資料をフィードバックし同時に皆で共有しえるという可能性である。これは、映像資料そのものもつ可能性として指摘したように、まさに万人が言葉を超えて共有しやすい間口の広さ故に可能となることでもある。ここでは、地域社会全体に対する資料の提供、つまり映像資料の万人にとっての文化資源化／社会化ということの一端がある意味で実践される可能性を有していると考えられる。

新たな可能性の第2は、前述した現地上映会という方法の可能性である。現地上映会という方法には、映像そのものの共有を超えて、映像を同じ時と場所（いま—ここ）で「見て・読み」、「語り・伝え合う」という経験を共有する可能性、また身体的動作や感情までもが共有される可能性が内包されているのである。

そして、いま—ここで同じ映像を見ることを通して、新たに経験や身体動作、感情を共有していくことで、それが更なる新しい未来を胚胎していく可能性につながっていくことも最後に指摘しておきたい<sup>(65)</sup>。例えば十島村の上映会での民俗芸能の映像を見た際の事例である。そこでは、かつてのフィルムを共に見て語り合い、身体を介して映像に共振し、現在の狂言を再現して会場で披露して見せながら、他方で、現在は踊られていない踊りがフィルムで映し出されると、また語り合っただけで情報を伝え合うことで、この踊りを是非未来に継承していきたいという新たな動きへと導かれていった事例を思い浮かべることができるだろう。つまり現地上映会という方法は、当時を共同／協働で想起し、経験を共有するだけではなく、フィルム上映会の場を通じて、いま—ここや未来においてあり得べき新たな現地のコミュニティを想像／創造する動きへとつながる可能性をも有しているのである<sup>(66)</sup>。

アチックフィルム・写真というビジュアル映像資料は過去のサルベージにとどまらない。その現地上映会という方法も、過去への郷愁にとどまるものではない。上映会という方法は、その場で経験を共有し、身体と感情を共振させることによって、未来のあり得べき可能態を創造し生成させる母胎として<sup>(67)</sup>、また、未来への新たな生を切り拓くひとつの基点として大きな可能性を有するものとなりえるのである。

## 注

- (1) 渋沢敬三は、1896（明治29）年に渋沢栄一の孫として生まれ、東京帝国大学経済学部卒業後、横浜正金銀行、第一銀行を経て日本銀行総裁、大蔵大臣をつとめた。一方で、アチックミュージアムを主宰し、民俗学や漁業史を研究、学術団体を支援するなど文化学術活動にも注力した。
- (2) アチックミュージアムとは、渋沢敬三によって1921（大正10）年に創設されたアチックミュージアムソサエティを前身とし、東京三田綱町（現在の港区三田）にあった渋沢邸の屋根裏部屋を標本資料の陳列室としたことに始まるとされる（近藤 2013）。その後、渋沢を中心に多くの同人が集まり、玩具研究や民具研究、民俗研究、水産史研究などにも活動の幅を広げていく。1942（昭和17）年に名称を日本常民文化研究所に改称し、戦時下にあつて活動の縮小を余儀なくされるが、戦後に財団法人として再出発した後も水産資料の収集や整理、民具研究の中心として機能してきた。その後、1981年に神奈川大学と財団法人との間で研究所の委譲に関する覚書がかわされ、神奈川大学日本常民文化研究所へ移管されて現在に至っている。
- (3) これまで神奈川大学における文部科学省21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003～07年度）の第3班において、主に写真にみる景観などに関する研究が進められてきた。
- (4) 共同研究に参加したメンバー構成の詳細は本書巻頭の別表を参照。
- (5) アチック写真の概要と常民研における整理状況については、小林（2014）を参照。
- (6) アチック写真の中には、戦後の財団法人日本常民文化研究所の運営に携わっていた河岡武春によって別置されていた写真も含まれている。
- (7) 台紙に記載されている情報の一例は以下のようなものである。「93（台紙右上に青インクでナンバリング）／（以下写真の下部に黒インクで手書き）口之島／島民の歓迎／島産の材により島民の技に／依りて作られたる特有の舟、一艘一人／主義で鰹漁に出掛けるものにして島民／生命の網と称せらるるもの（谷口熊之助作）」。
- (8) 宮本馨太郎（1911〈明治44〉～1979〈昭和54〉年）は、大学在学中からアチックミュージアム調査に参加し、民具や服飾の研究を行った。また、映画に造詣が深く、自ら9.5ミリのフィルムを撮影したのみならず、アチックフィルムの撮影・編集でも大きな役割を果たしたと考えられる。その資料は現在、宮本記念財団に所蔵されている。
- (9) 早川孝太郎（1889〈明治22〉～1956〈昭和31〉年）は、アチックミュージアムの活動に参加し、主に民俗、民具、芸能研究に携わり、写真のほかスケッチも多く残している。特に『花祭』を著し、『早川孝太郎全集』も刊行されている。
- (10) 高橋文太郎（1903〈明治36〉～1948〈昭和23〉年）は、アチック同人として民俗学的調査に同行した。秋田のマタギに関する資料などを残している。
- (11) 桜田勝徳（1903〈明治36〉～1979〈昭和54〉年）は、アチック同人として調査に加わり、特に漁村民俗に関する研究を行った。
- (12) 村上清文（生没年不詳）は、アチック調査や民具整理に参加した。特に越後三面周辺の調査を行った。
- (13) 小川徹（1914〈大正3〉～2001〈平成13〉年）は、大学在学中からアチックミュージアム調査や民具整理などに携わった。
- (14) この目録化作業は、常民研本体として取り組んできたもので、2009年度に国際常民文化研究機構が発足してから2013年度にかけては、機構の所蔵資料情報共有化に関する事業として推進されてきた。具体的な作業を進めたのは本共同研究の活動にも参加した小林光一郎と羽毛田智幸などである。
- (15) 特に本目録には以下の項目を含んでいる。目録番号／アルバム背表紙／都道府県・国／関連目録番号／外装記載／題名／台紙の有無 台紙記載 台紙情報詳細／台紙法量／写真資料の有無／写真資料記載／写真資料・外装法量／備考／引用・使用媒体／他研究機関所蔵資料情報／撮影者／撮影年月日／撮影地域／付箋。
- (16) 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 1-8』は神奈川大学日本常民文化研究所や国際常民文化研究機構が編集・発行したもので非売品であるが、ウェブサイト「アチックミュージアムにおける写真資料」（<http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/publication.html> 2014年8月20日現在）ではvol. 1-5が閲覧可能である。
- (17) これまでのアチックフィルムを対象とした研究には、岡田・原田（1998）や小林（2012）、木村（2014）などがある。また、アチック同人として映画・映像に造詣が深く個人でも映像撮影や編集を行っていた宮本馨太郎は、アチックミュージアムの調査旅行に同行しながら独自のフィルムを残しているが、そうした宮本の映像に関する研究には、北村（2005）などがある。
- (18) 複製コピー作成の経緯詳細に関しては十分に明らかでないところも多いが、主に下中記念財団EC日本アーカイブズが作業を担ってきた。
- (19) アチック調査の旅に関しては、近藤（2001）や斎藤（2001）も参照。
- (20) 鹿野忠雄（1906〈明治39〉～1945〈昭和20〉年）は、生物地理学や民族学を専門とし、特に台湾のヤミ

族、パイワン族などの原住民研究を先導した一人である。

- (21) 薩南十島調査に関しては、飯田（2013）や笹原（2001）も参照。
- (22) 同行者の詳細は渋沢（1953）、中山（1956）などの記述による。
- (23) 大西伍一（1898〈明治31〉～1992〈平成4〉年）は、アチックミュージアムに参加しながら農村教育にも携わった。
- (24) 原田清（1894〈明治27〉～1947〈昭和22〉年）は、アチックミュージアムでは特に早川を中心とする花祭調査に携わった。
- (25) 江崎悌三（1899〈明治32〉～1957〈昭和32〉年）は、生物学を中心に専門が多方面にわたり、九州帝国大学教授ともなる。
- (26) 小出満二（1879〈明治12〉～1955〈昭和30〉年）は、農学、農業経済を専門とし、九州帝国大学教授。
- (27) 谷口熊之助（生没年不詳）は、農学を主として、当時鹿児島高等農林学校に属していた。
- (28) 鈴木醇（1896〈明治29〉～1970〈昭和45〉年）は、地質学を専門とし、当時は北海道帝国大学教授。
- (29) 宇野円空（1885〈明治18〉～1949〈昭和24〉年）は、宗教学、宗教民族学者で、当時は東京帝国大学。
- (30) 三宅宗悦（1905〈明治38〉～1944〈昭和19〉年）は、自然人類学、考古学を専攻し、当時は京都帝国大学。
- (31) 九学会連合と共同調査に関しては、坂野（2012：1-19）を参照。
- (32) 神奈川大学 国際常民文化研究機構（2014：17-138）を参照。なおこの叢書〔資料編〕の編集には因琢哉と岡田翔平の協力を得た。
- (33) 他には『パイワン族の探訪記録』が約47分の作品で、その他の作品は10分から20分程度の作品が多い。
- (34) 神奈川大学 国際常民文化研究機構（2014：151-171）を参照。
- (35) 薩南十島調査の映像資料に記録されているモノ（民具）と、調査で収集され、現在国立民族学博物館に標本資料として収蔵されているモノ（民具）との照合関係に関しては、神奈川大学 国際常民文化研究機構（2014：139-149）を参照。
- (36) 渋沢本人は1926（大正15）年に台湾を訪れ、その際に「南島見聞録」を記している。そこでは、台湾の本省人や原住民の生活を日本人に向けるのと対等の目線で記述している。中では、「台湾の小学生に朝鮮征伐を事細かに教え込んだり、オドオドする児童にテニヲハを詰め込んだりすることによって、台湾人が日本人に脱化したり、或は彼らの民族的自覚を消失し得るとでも思っているのか。（中略）真の日本人と真の台湾人との間に、真正な有機的結合を生ぜしむるための文化的施設なり心構えなりを、今から懸命に考えている人が一体何人居るのであろうか」（渋沢1992a：55-56）として、日本統治による同化政策を批判している。
- (37) アチックミュージアムにおける鹿野忠雄の役割やパイワン族調査に関しては野林（2001）を参照。
- (38) 宮本・小川（1937）を参照。
- (39) こうした点は、宮本記念財団における宮本馨太郎の映像記録を新たに整備する事業の中で、より鮮明な映像が作成されたことで明らかになってきた。
- (40) 民具を製作する過程に着目し、その身体動作を含めて映像に記録する視点は、宮本馨太郎が1930（昭和5）年に製作した『うちの出来るまで』という映像などにも見て取れる。
- (41) 佐藤（2014）では、渋沢敬三における実物重視に関して「物それ自体のもつ価値に関心を限定したというより、その物が生活のなかで生みだされ、使われ、あるいは消滅していく『場』をもとに把握することの方法的な重要性を提起したものだ」（佐藤2014：86）と指摘している。また須藤（2014）は、宮本常一の写真に関して、「たとえば畑で働く人を撮ったときには、その左右の情景も撮っています。働く人とのつながりをメモしておくためです」（須藤2014：56）として、「『生活史』としての写真」と位置づけている。
- (42) 宮本記念財団は、アチック同人だった宮本馨太郎とその父勢助の事業を記念して設立されたもので、民具、服飾などの物質文化研究資料館を付属している。
- (43) この現地上映会では、特に当時口之島小中学校の校長をつとめておられ、本書にコメントを寄せて頂いている日高松行氏の協力を得た。
- (44) この現地上映会では、特に当時中之島役場支所の徳丸秀樹氏の協力を得た。
- (45) ここでまとめた現地上映会の方法に関する概要は高城（2011）と因・岡田（本書所収論文）も参照。
- (46) ここで検討する事例は、高城（2011）でも調査報告として紹介した。
- (47) この点に関連して、地域・映像・アーカイブをつなげる試論の中で原田（2013：4）は「（未来に痕跡を残そうとする）意志の堆積は、時を経て、不断に『今』その映像をみる人の現在へと繋げ、ひとつのコミュニティとして『記憶の共同体』を編成する」と指摘している。
- (48) 台湾パイワン族集落での上映会と調査には、本書にも現地からのコメントを寄せて頂いている中華民国行政院原住民族委員会の林志仁氏と日本語・中国語・パイワン語が堪能な華阿財氏の協力を得た。
- (49) 宮本常一（1993：108）を参照。
- (50) アチックミュージアム編（1936）を参照。

- (51) 丸山 (2013: 83-84) を参照。
- (52) 杉島 (2001: 6-7) を参照。他に清水 (1992) でも同様にサルベージ人類学を批判している。
- (53) 清水 (2006: 84-85) を参照。
- (54) Odo (2000) を参照。
- (55) 民俗学において、渋沢らの写真利用に比べて、柳田国男の民俗学と写真の関係は概して淡いと捉えられてきた中で、佐藤 (2012) は改めて柳田における写真の意味を探っている。
- (56) 箭内 (2014a: 18) も参照。
- (57) 相沢 (2005: 62-63) を参照。
- (58) 同様の指摘は他にも散見される。例えば、朝鮮多島海のアチックフィルムを取りあげた崔 (2005: 128) は「カメラはカメラマンが意識したり、あるいは意識していない部分まで写すことがある。(中略) 場合によっては撮影者の意図以上に客観的に記録されてしまう」と指摘する。また映像民俗誌の可能性を論じる田口 (2005: 141-142) も「映像には撮り手、作り手の意図を超えるものもしばしば写されることがある。撮影時に撮り手が意識していなかったことまでフィルムは忠実にとらえてしまう。(中略) そこに偶然性と意外性が生じる。機械だからこそ可能なことなのである」としている。同様に画像資料と民俗学の関係を論じる小川 (2004: 96) も「画像そのものには撮影者が意図しないにも拘わらず、様々な情報が盛り込まれているということである。そもそも画像というものには、文章では表現しきれないほどの情報が含まれているのである」としている。
- (59) 箭内 (2014b: 96) を参照。
- (60) この点に関連して、原田 (2013: 17) は「映像メディアは、時間と記憶を外化したものとして残存し、また保存されることで、不断に人びとの感情や感覚を増幅し、個人の意識や記憶の世界を拡大する」と指摘している。
- (61) ルーシュ・パウエル・大森 (2000: 24) を参照。
- (62) 箭内 (2014a: 9) を参照。
- (63) 渋沢 (1992b: 577) を参照。
- (64) 渋沢 (1992c: 618) を参照。
- (65) この点に関して、箭内 (2014b: 105) は「映画の本来の働きは、フィルムの中に刻印されたイメージにあるのではなくて、(中略) 我々の新しい思考、新しい行動を生み出していく、生きたプロセスの中にあるものである」と指摘している。また、写真回想法という方法も過去の写真を見て回想することで、未来とのつながりを生み出すことが指摘されている。そこでは、「回想法として聴く話は確かに過去のものです。しかし、その思い、精神性は、語り手と聴き手という人のつながりを通して、現在に生きる私たちへと引き継がれ、さらに未来へとつながっていくのです」(萩原 2014: 133) とされる。
- (66) 地域映像アーカイブに関連してではあるが、原田 (2013: 19) は「残された過去をもう一度捉え直し、時間を越えた対話をするを通し、地域の様々な共同性に関わり、さらには映像を媒介させることで、新たな記憶と現在を創造することに加担する」と指摘する。
- (67) ここでの「母胎」という言葉は、映像民族誌における共有と引用の必要性を指摘した大村 (2014) を参考としている。そこでは「人類学者も現地の人々も含め、さまざまな人々の協働を通して次々と新たな語り創造されるための苗床、生成と創造のマトリクス (母胎)」(大村 2014: 236) の重要性が指摘されている。

---

## 参考文献

- 相沢詔男 2005 「〈尊民攘夷〉の民俗学—宮本常一『大内宿』再考」『季刊東北学』4 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- アチックミュージアム編 1936 『民具蒐集調査要目』アチックミュージアム。
- 飯田卓 2013 「薩南十島調査の意味」国立民族学博物館編 『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』国立民族学博物館。
- 大村敬一 2014 「共有から引用へ—生成と創造のマトリクスの構築に向けて」村尾静二・箭内匡・久保正敏編 『映像人類学 (シネ・アンソロポロジー) —人類学の新たな実践へ』せりか書房。
- 岡田一男・原田健一 1998 「渋沢敬三のフィルムについて」『映像民俗学』4 日本映像民俗学の会。
- 緒方直人・後藤真編 2012 『写真経験の社会史—写真史料研究の出発』岩田書院。
- 小川徹 1935 「薩南十島家・畑・水」『旅』12 (8) 日本旅行倶楽部。
- 小川直之 2004 「画像資料と民俗学」『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』1 國學院大學日本文化研究所。
- 加藤友子 2002 「くらしを記録するⅢ—映画」横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館。

- 北村皆雄 2005 「宮本馨太郎、始まりの映像民俗学」『季刊東北学』4 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- 木村裕樹 2014 「紀行文と旅映画—渋沢フィルム〈飛鳥〉を事例として」村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学(シネ・アンソロポロジー)—人類学の新たな実践へ』せりか書房。
- 神奈川大学 国際常民文化研究機構編 2014 『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構編 2010 『神奈川大学日本常民文化研究所アチック写真 vol. 2』神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構編 2011 『神奈川大学日本常民文化研究所アチック写真 vol. 4』神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 国立民族学博物館編 2013 『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』国立民族学博物館。
- 小林光一郎 2012 「二つの『花祭』—アチック 16 ミリフィルム『花祭(網町邸)』と『花祭(三河北設楽郡)』」『歴史と民俗』28 神奈川大学日本常民文化研究所。
- 小林光一郎 2014 「アチック写真資料目録—本目録について」神奈川大学 国際常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 近藤雅樹編 2001 『図説 大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社。
- 近藤雅樹 2001 「民俗採訪調査団 近藤雅樹編『図説 大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社。
- 近藤雅樹 2013 「渋沢敬三とアチックミュージアム」国立民族学博物館編『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』国立民族学博物館。
- 斎藤純 2001 「アチック・ミュージアム旅行団 近藤雅樹編『図説 大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社。
- 坂野徹 2012 『フィールドワークの戦後史—宮本常一と九学会連合』吉川弘文館。
- 桜田勝徳 1979 「敬三とアチックミュージアム」渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会。
- 笹原亮二 2001 「薩南十島」近藤雅樹編『図説 大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社。
- 佐藤健二 2012 「柳田国男と写真—『自然主義』と『重ね取り写真』の方法意識」緒方直人・後藤真編『写真経験の社会史—写真史料研究の発信』岩田書院。
- 佐藤健二 2014 「渋沢敬三における『もうひとつの民間学』」『歴史と民俗』30 神奈川大学日本常民文化研究所。
- 渋沢敬三 1953 「20年前の薩南十島巡り」『朝日新聞』1953年5月20日。
- 渋沢敬三 1992a 「南島見聞録」網野善彦他編『澁澤敬三著作集 1』平凡社。
- 渋沢敬三 1992b 「『豆州内浦漁民史料』序—本書成立の由来」網野善彦他編『澁澤敬三著作集 1』平凡社。
- 渋沢敬三 1992c 「所感—昭和16年11月2日社会経済史学会第11回大会にて」網野善彦他編『澁澤敬三著作集 1』平凡社。
- 渋沢敬三 1993 「旅譜と片影」網野善彦他編『澁澤敬三著作集 4』平凡社。
- 清水昭俊 1992 「永遠の未開文化と周辺民族」『国立民族学博物館研究報告』17(3)。
- 清水昭俊 2006 「これまでの仕事、これからの仕事」『くにたち人類学研究』1 一橋大学。
- 杉島敬志 2001 「序論 ポストコロニアル転回後の人類学的実践」杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』世界思想社。
- 須藤功 2014 「『生活史』としての写真」石川直樹・須藤功・赤城耕一・畑中章宏『宮本常一と写真』平凡社。
- 高城玲 2011 「トカラ列島口之島と中之島におけるアチックフィルム上映会」『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』2。
- 高橋文太郎 1934 「奄美十島及び大島に於る民具—主として運搬具と仕様法—」『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社。
- 田口洋美 2005 「映像民俗誌の可能性」『季刊東北学』4 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- 崔吉城 2005 「映像からみた植民地朝鮮の民俗」『季刊東北学』4 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- 中山正則編 1956 『柏葉拾遺』柏窓会。
- 野林厚志 2001 「台湾」近藤雅樹編『図説 大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社。
- 萩原裕子 2014 「人・土地そして未来へのつながり」鈴木正典監修、萩原裕子助言、須藤功写真解説『昭和の暮らしで写真回想法 3 農・山・漁の仕事』農文協。

- 早川孝太郎 1934 「踊りの着物—薩南十島にて—」『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社。
- 羽毛田智幸・小林光一郎 2014 「昭和9年薩南十島調査行程図」神奈川大学 国際常民文化研究機構編 『国際常民文化研究叢書8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 原田健一 2010 「モノをめぐる渋沢敬三の構想力—経済と文化をつなぐもの—」『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』1。
- 原田健一 2013 「地域・映像・アーカイブをつなげるための試論」原田健一・石井仁志編 『懐かしさは未来とともにやってくる—地域映像アーカイブの理論と実際』学文社。
- 丸山泰明 2013 『渋沢敬三と今和次郎—博物館的想像力の近代』青弓社。
- 三宅宗悦 1934 「薩南十島探訪挿話」『ドルメン』7月号 岡書院。
- 宮本馨太郎・小川徹 1937 「台湾旅行記」『日本民族学会 学報』IV。
- 宮本常一 1993 『民俗学の旅』講談社学術文庫。
- 森本孝・関野吉晴・赤坂憲雄・田口洋美 2005 「座談会 宮本常一が遺したもの」『季刊東北学』4 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- 箭内匡 2014a 「人類学から映像—人類学（シネ・アンソロポロジー）へ」村尾静二・箭内匡・久保正敏編 『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）—人類学の新たな実践へ』せりか書房。
- 箭内匡 2014b 「ジャン・ルーシュの思想—『他者になる』ことの映画—人類学」村尾静二・箭内匡・久保正敏編 『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）—人類学の新たな実践へ』せりか書房。
- 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002 『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館。
- ルーシュ, J.・パウエル, E.・大森康宏 2000 「特別座談会 人類文化と映像」大森康宏編 『映像文化』ドメス出版。
- Odo, D. 2000 "Anthropological Boundaries and Photographic Frontiers: J.H. Green's Visual Language of Salvage", in Dell, E. ed., *Burma Frontier Photographs: 1918-1935*, London: Merrell Publishers.